

基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

二〇一四年度 第一回公開シンポジウム

「〈情動 sense, emotion and affect〉と  
〈社会的なもの the social〉の交叉をめぐる人類学的研究」

日時 二〇一四年七月五日（土） 一四：〇〇～一九：〇〇

場所 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）  
三階マルチメディアセミナー室（三〇六）



	I	趣旨説明 (西井涼子 A A 研)	1
	II	発表	
	1	アート、宗教、生成 (岡崎 彰 一橋大学)	11
	2	身体・エロス (田中 雅一 京都大学)	21
	3	非人間―もの・技術 (床呂 郁哉 A A 研)	30
	4	場所性―移動と空間 (内藤 直樹 徳島大学)	46
	5	災害・政治・生 (真島 一郎 A A 研)	55
	III	コメント	
		田崎 英明 (立教大学)	63
		高木光太郎 (青山学院大学)	71
	IV	全体討議	87
基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」とは			97



## I 趣旨説明

西井 凉子（AA研）

最初に私が三〇分ぐらい趣旨説明をさせていただきます。実はのっけから謝らなければいけないのですが、岡崎先生が来られなくなりまして、急遽代役で、AA研の佐久間の方から代読をさせていただきます。その後、一橋大学の久保さんからコメントをいただくという形になっております。二番目の田中さんはご本人がいらつしゃつてますので、ご本人に「身体・エロス」というタイトルでお話しさせていただきます。三番目の床呂さんは「非人間―もとの・技術」に関するお話です。四番目の内藤さんに「場所性―移動と空間」、それから、五番目の最後に真島一郎さんに「災害・政治・生」についてお話させていただきます。

手順ですが、時間的に最初の私の趣旨説明と二番目まで続けてやりまして、一〇分ほど休憩を入れます。残りの三つは一つのセッションという形にして、発表は大体二〇分ぐらいを予定しておりますので、一〇分の休憩を挟んだ後に三つをやった後で、コメントーターの田崎先生と高木先生にコメントを頂くという形にさせていただきますと思います。

今、レジュメが足りなくなっているようなので、急遽コピーをしにしておりますので、足りない方は後でまたお配りしたいと思います。

すみません、自己紹介を忘れました。私はAA研の西井と申します。最初の趣旨説明を私の方からさせていただきますと思います。

まず今日の趣旨説明です。昨年度からAA研で「情動」に関する研究会をやっております。レジュメの一番最後の「研究主題のさらなる焦点化と先導化にむけて」ということで、



昨年度は「情動と社会的なものの交叉をめぐる臨地・理論研究」としてやっていました。これは今は読み上げませんが、こうした昨年度の研究を踏まえて、今年度はより具体的なものにしていこう、より成果のあるものに向けてやっていこうという趣旨でやっております。昨年度は表題の情動のところに *affectus* と書いておりますが、今年度は *affectus* だけではなく、*sense, emotion, affect* と三つ並べております。それはまた後ほど説明いたします。

まず、「はじめに」です。個人的なきっかけから、なぜ「情動」というものに着目するようになったかということですが、そもそも私の個人的な動機は、調査におけるフィールドワーク論の方法論として「情動」に着目するということに興味を持ち始めたことでした。それは人類学者が身体として現場にあり、そこでの人々との相互行為によって感得したものが、なぜ社会学論に独自の貢献をなし得るのかという問題を考えていこうということと考え始めました。そこで、人類学は根源的には感性による人間の共感能力の上に成り立っているというのが、私が今思っていることです。

そもそもこういうことに興味を持ち始めたのは、一番後ろに菅原さんの『感情の猿Ⅱ人』を挙げてありますが、菅原さんが感情を「行為空間に参入する主体の表情を帯びた身振り」と捉えて、それによって群居性霊長類の共在を駆動し続けるエンジンだということをおっしゃっています。そういうところから、普通に私たちが人類学で対象としているような人々も、フィールドワークにおいては、そこに一緒にいる、共にいるということが実は重要なのではないか。その共にいるということの重要性を情動ということと考えてみたら、どのように新たな側面が浮かび上がるのかを考えてみたいということなのです。

昨年出した拙著で、『情動のエスノグラフィ・南タイの村で感じる\*つながる\*生きる』というものがありますが、それは私がこの二十数年来、調査をしている南タイの村の人々との関わりから書いたものです。その中で初めて情動を取り上げてみました。このように共

在することが重要だと言ってみたとところで、実際はどのようなことを意味しているのかということを示すために、今日は一つの例として、南タイの「憑霊する学校」をとりあげてみます。この「憑霊する学校」は、『情動のエスノグラフィ』の初めの方の第二章で取り上げたテーマなのですが、簡単にご紹介したいと思います。

南タイの「憑霊する学校」に関して、四角枠でくくってあるところがタイの「タイ・ラット」という全国紙に載った記事です。

「『仰天、憑霊する学校―身もだえする生徒を互いに制止』、集団幻覚の様相に似ている！

しかし、村人は原因は「祠」(saan phiang taa、臨時の儀式用に建てる目の高さほどの祠)を取り壊したことがある、だから問題が起こったのだという。呪われた学校をみつける。中・高等学校の生徒が奇妙な症状を示す。健全だった生徒が、金切り声をあげ泣き喚き、身もだえしてもがき苦しむ。友人たちが助けあって止める。ようやく平静に戻っても、ふたたび何の原因もなく繰り返し同時に何人にもおこる。ついには残りの生徒たちが勉強することができない状態になる。これは何年にもわたっておこってきたことである。学校側は病院へもつれていったが、検査しても何も異常なところはみつからない。そこで、今度は呪術的(サイヤツサー)方法を使うことにした。呪医(モー・ピー)を連れてきて例えば三年ごとにヤギを二頭を殺してささげ儀礼を行った。そして臨時の祠を建てた。しかし、一番最近では効果がなかったので、先生がその祠を取り払ってしまった。やってきたことを信じないだけでなく、侮辱していると、保護者は不満に思っている。学校の建設工事のときに死者がでたか、この他学校の夜間の当直の先生が、長い髪の女性が歩き回っている夢を見たというは恐れている。子どもの父母たちの多くは、霊(ピー)が出る学校だと信じている」というような記事が載りました。

実はこの学校は、私がずっと調査してきた村の近くにある中学校です。村の中に小学校

があるのですけれども、そこを出たらここの学校に行く生徒が多いというようなところにあります。

次の事件の経過は省略しますが、事件と言えるかもしれないと思うのは、三カ月の間、とにかく学校に着くと生徒たちが憑依して、何十人もが教室の中を走り回ったり、校庭を走り回ったり、それから池に飛び込もうとしたりというような騒動がずっと続いていたということがあります。面白いのは、二〇〇四年一月一六日、津波があつたときなのですが、そのときには学校に近隣住民が避難してきて、その間だけは憑依することがなく、止まっています。その住民が退去したらまた始まつたというようなことがあり、結局、二月三日に校長が学校を去ることで収まつたという経過をたどっています。

今日これを持ってきたのは、憑依のときの状況が、共在と情動ということを考えるのに面白い事例ではないかと思つたからです。

「友人が憑依した女子生徒は次のように語つた。『人によっては、憑依しそうになつたら話せなくなる。ムー（友人の名前）と呼びかけても話せない。とても怖がる。入つてこないでと言う。ムーは首のところに、噛み跡が出る。彼女は、精霊が彼女を噛むという。憑依したときにはその噛み痕が赤くなる。とても赤い。左に二つ、そして右に』というようなことで、憑依、憑霊したときには、ある生徒の場合にはそういう身体的な反応が出ていました。

私は実はこの騒動の最中には調査に行かず、事後に学校に行つたり、憑依したという生徒やしなかつた生徒、父兄などから話を聞いてきました。マサヤーという女の子はとても聡明で、明るい感じのきはきはした利発そうな女の子です。彼女自身は憑依したときのことを次のように語りました。「憑依中のことは覚えていない。入る前の状態は、何かが横にいて、怖いと感じる。もうすぐ入りそうだと、怖いと感じる。そして、何も感じなくなる。もう感じない。心を強くしようと思つても、なつてしまふともう駄目だ」。その後、マサヤーは憑



依しなくなりましたが、友人たちはまだ憑依することが止まっていなかったのです、スカートも破いたりしながら、とにかく走り回ったりいろいろなことをしていました。「あんたもあんなふうだった」と言われておかしかったというようなことを言っています。

この憑依空間は、一〇人、二〇人と憑依する生徒が増えるに従って、さまざまな関係が現れてきたということです。実際に仲のいい生徒同士と関係なく、精霊同士の仲がいいとか、生徒同士は仲が悪いのに精霊が仲がいいから手をつないで座っていたり、精霊間で実際の生徒同士とは別の関係性が出てきたというようなことがありました。「精霊の中に秩序ができた。精霊のリーダーが出現した。体の大きい運動選手である男子生徒に憑依した精霊だ」というようなことで、その男子生徒は、他の憑依した女子生徒のところに行って、「戻れ、池の中に戻れ、ここには上がってくるな。遊ぶところではない。言うことを聞かないと蹴り上げるぞ。おれと戦うことができるのか」と言ったということです。

実際に学校の中の憑依は三カ月間かかって収まるわけなのですけれども、それまでは生徒は三〇分ぐらい憑依するなど、人によって時間は違うのですが、そういうことがずっと繰り返して起こっていたという状況がありました。こういう状況が、ある意味、情動の伝染といえますか、連鎖といえますか、その場にいることによって、本人の意思と関係なくそういうことが起こってしまうということがある。それが情動ということ、それから、情動の社会性、人間性というか、共同性というところとつながっていくのではないかと私は思います。

人類学における理論的背景としては、六〇年代までの人類学は意識の再生産として儀礼に関心を集中させてきました。それ以降の動向としては、意図とか、意思とか、そういうところを超えたような形での実践に着目するプラクティス論があげられます。これは田辺繁治先生の『生き方の人類学』から抜粋したものですけれども、「無意識のプログラムによって操

られるように扱う『客観主義的』構造人類学が隆盛する一方で、人々は主観的意識の中にあり、生きられた経験、自明である実践そのものを描くことによって、実践の真理を捉えることが可能であるとする主観主義的な立場、現象学などが見られる。後者においては、なぜ人々がそう感じざるを得ないかという現実的な諸条件を問うことを放棄してしまう。双方の克服を目指したのが、日常実践に注目したブルデューの『構築主義的な構造主義』である」という理論的な背景があります。

それから、九〇年代に入って、『文化を書く』というライティング・カルチャーシヨックというようなことが民族誌を書く上でも非常に大きな影響を与えることとなります。これは春日さんがまとめていらっしゃるものを持ってきたのですが、そうした中でも、例えばブルノ・ラトゥール、アルフレッド・ジェル、マリリン・ストラザーンなどがそれぞれ行っていたことが、存在論的転換と称する一連の流れの中で捉えられるようになってきたということです。従来の人類学が、既に実在する何か、特定の人々にどう認識されているのかという問題設定であるのに対して、新しい人類学では、実在が決して所与ではなく、特定の関係を通じて構築されることを説明すべきである、いわば認識論から存在論への転換という流れがあるとまとめられています。

この「〈情動〉と〈社会的なもの〉の交叉をめぐる人類学的研究」も、やはりそうした関係論的な視点、既にあるものを明らかにするというよりも、生成していくようなものを現場から見たいという視点に立っております。

ここで、本研究の目的として、人類学における情動の捉え方をざっと、レビューというところでもないのですが、見てみますと、これまでの情動をめぐる人類学研究は、emotionとしての研究がずっとなされてきたと言えるのではないかと思います。ですから、emotionの社会的関係とか感情、むしろ感情と文化です。例えばロサルドなどにみられるような、文化に

よってどのような感情表出をするのかなど、文化形式に焦点を当てたアプローチがあったのではないかと思います。

一方で、昨年は *affect* にだけ焦点を当てていたわけなのですが、こちらの *affect* は個体の怒りや悲しみといった通常の個人の感情に限定されず、意識や主体を超えて、フィールドに共存する身体が互いに影響し合うことで生み出される反響関係に焦点化するための概念です。その関係は、人と人の関係のみではなくて、人やモノ、環境という関連性のプロセスを含むようなものとして考えたいということです。主体といった人間の意志を起点として物事を捉えていく方向とは逆に、むしろ受動性に焦点を当てる。物事に巻き込まれていく受動性に焦点を当てることで浮かび上がる生の現実を照射することを目指すということを考えていました。

近年では、五感とよく言われる感覚ですけども、視覚や聴覚、味覚、嗅覚などのいろいろな感覚が実は非常にダイナミックであって、それらのいろいろな連合があったり、融合があったりというようなことの研究が進められている状況があります。

それから、身体経験に関しては、心理学、特に精神分析に非常にこの研究の蓄積があるわけです。それに少しだけ触れておきますと、ここにもいらつしゃる黒田先生に紹介していた兼本さんという方、精神科のお医者さんですが、その方が書かれた本の中にも非常に明瞭に情動と脳の関係を考えてみるという研究もあります。

そういう中でも、例えばデカルトの心身二元論を排して、スピノザの心身並行説から感情、感覚といった心的経験のみではなく、身体的なものを含み込んだプロセスとして情動を捉え返す方向性があったり、それから、ダマシオの研究も有名です。つまり、感情と理性というように対立的に捉えられてきたことが、そうではなくて、実は感情というものがある判断をするときにはものすごく重要であるという指摘があったりするということです。ダマシオの

場合は、emotion がむしろ非常に基底的な、脳にモニターされた身体反応で、フィードバック、感情がそれを高級にしたようなものであり、むしろ人間にはフィードバックがあるけれども、虫にも emotion があるというような使い方をしています。

やまだようこさんの新生児の研究といるのがあるのですが、このやまだようこさんは、先ほど挙げた菅原和孝さんの本にもしばしば引用されましたが、新生児の「みるーうたう」という関係が、「みるーとる」の関係に先行するのだということです。つまり、赤ん坊の「私」は、人と人が織りなす共同体の中の一つの結節点のような形で存在していて、共同体の揺れや動きにただただ共鳴し、開かれている存在であり、そうした共鳴の仕方を「うたう」という言葉でやまだは表現しています。存在するということが、共鳴する、他者ともにある。これを他者と言っているかどうかおくと、そうした存在としての指摘があると思います。

本研究の目的は、今日発表していただく五人の方々にはそれぞれのテーマを決めてやっていただくのですが、一の人間中心ではない見方というのは、全体に共有しているというよりも、最初に私たちがA A研で考えていたことだったのです。ただ、関係論的視点に情動 (sense, emotion, affect) を導入するということがあっても、そこで私たちが対象とするのは、関係論的なものはもちろんいろいろあるわけなのですが、やはり人間が関わる生であるということと、そういう意味では、人間中心主義ではないのですが、人間が関わる生を対象にするということは少なくともあると言えらるかと思えます。

そうした関係論的な視点に情動という観点を入れるということと、出来事が動いていくところをいかに見ていけるのか。それから、そうした情動の流れと、それをコントロールしようとするせめぎ合いをどう見ることができるとかを考えたと思います。これまで政治や医療、芸術、さまざまな方面においてばらばらにそれぞれ研究はされてきたと思うので

すが、これを一つ情動ということでもまとめることによって、何か人間社会の本源的なあり方に迫ることができるのではないだろうかという目論見です。

ただ、こういう情動というものを取り上げたときに、人類学研究がどこまで何を明らかにできるのかということが問題となります。群居性動物というのは霊長類学の方などが使われている言葉だと思うのですが、人間は個体単体では生きられない。つまり、社会性、共同性というようなものは、やはり人間のあり方を明らかにするところの要になるのではないだろうかということがあります。

例えば私たちの研究会「ミクロマクロ連関」という、A A研の人類学班のタイトルでもある研究会に、実はつい先日、神経医学の南雅文先生という北大の方に来ていただき、講演をしていただきました。南先生はマウスを使って痛みの研究をされています。脳内物質がどのように出るかとか、どういう脳内物質がどのように痛みと情動に関連してくるのかというような研究をされていて、そこでお話を伺っていて、人類学ができることは、ある意味はつきりしてきたのかなと思いました。例えば医学や神経生理学といった分子レベルの分野における情動研究は非常に盛んであるということが、初めて分かりました。南先生たちの研究グループはこの数年ずっと大規模な研究会を開催されていて、その中でも医学関係の方々がそうした情動というテーマでずっと研究されていてということを知りました。

そこで私たちができることは何だろうかと考えたときに、私たちは分子レベルまで人間を明らかにするところまではできません。ただ、ある意味、個体レベルからさらに集合レベルというか、人間が現実によろしく生きていくのか、どのように私たちの生き方を捉えるのかということ、人類学や社会学も含まれるかと思いますが、やれることが何かあるのではないかと、逆にそちらの方にできることがあるのではないかと思いました。人類学においては、生の現場において個体のレベルを超えた生のアクチュアリティを捉えることで社

会性や共同性を見ていくということです。

それから、先ほど、やまだようこさんの「みるーうたう」の関係としての人間ということをご紹介したのですけれども、これは兼本さんの本の引用ですが、「赤ん坊の『私』は、人と人が織りなす共同体の中の一つの結節点のような形で存在していて、共同体の揺れや動きにただただ共鳴し、開かれている存在であり、そうした共鳴の仕方を『うたう』という言葉でやまだは表現していた」ということです。冒頭で紹介した集団憑依の状況、情動が伝染していくような状況の中でも、こうした人間存在のあり方、身体としてあって、他者に共鳴するというあり方を私たちは人類学研究で追求していくことに何か意味があるのではないかと思っております。

最後に「パワー・スポットならぬパワー・トピックス」と書きました。情動がより強く働くテーマとはどういうものがあるだろうかというので、たまたま人類学班の藤野さんが「パワー・スポットみたいなの」という表現をされたので、それはいいと思ったのですが、さすがにパワー・スポットというわけにはいかないので、トピックスとして、情動というような動き、情動を研究する上において非常に面白いのではないかと思うテーマを幾つか挙げてみた中で、今日のところはこの五つのテーマに絞ってやってみたいと思っております。

以上を私の趣旨説明とさせていただきます。

それでは、あと二つ続けて発表していただきまして休憩を入れたいと思います。次の「アート、宗教、生成」というところで、質問などはどうしましょう。後でいいですか。時間がなくなってしまうのでまとめてということ、一番最後にまとめてさせていただきます。

では、すみません、代読、佐久間という形でよろしく願います。

## Ⅱ 発表

### 1 アート、宗教、生成

岡崎 彰（二橋大学）

代読：佐久間 寛（A A 研）

（佐久間） ご紹介にあずかりましたA A研の佐久間です。岡崎先生のは、一枚目が「情動 sense, emotion and affect」と「社会的なもの the social」の交叉をめぐる人類学的研究」の三ページ目までがありまして、もう一枚めくっていただくと「アート、宗教、生成班 @ A A 研」というものが出てきます。こちらをそのまま読み上げていく形になりますので、もしお手元がない方がいらっしゃれば、コピーも補充しておきましたのでご確認いただけますでしょうか。

もう一度申し上げます。幾つかあるのですけれども、「A A 研基幹研究人類学班二〇一四年七月五日 西井涼子「情動 sense, emotion and affect」と「社会的なもの the social」の交叉をめぐる人類学的研究」が表紙になっているものです。これはもともと要旨集で、その要旨集の中に入っている岡崎先生のは、要旨というよりも既に読み上げ原稿になっておりますので、こちらを代読させていただきます。



## 「アート、宗教、生成」班 @ A A 研 岡崎 彰（代読：佐久間 寛）

六月一日、在日コートジボワール人たちが六本木のクラブを借り切って、対日ワールドカップ戦の衛星中継を日本チームファンたちと一緒に見るといイベントを企画し、そこで音楽を担当する義理の息子（コートジボワール人のドラマー）にビデオを撮ってくれと言われて参加した。

午前九時。六本木駅を出ると、そこはいつもの夜の怪しさの代わりに、おそろいのブルーのシャツを着てやや緊張した面持ちの若い男女で既にあふれかえていた。一〇時。数十人のコートジボワール人、そして、数百人の日本人と報道陣で立錐の余地もなく埋め尽くされたクラブ内で歓声が一斉に湧き上がる。熱狂は予想していたが、このような激しい歓声と深い溜息と応援の拍手が正確に同時発生し、果てしなく反復される事態に圧倒されないわけにはいかなかった。そして、腹に響くドラミングはどちら側に対しても応援していたので、その音圧によって歓声も溜息も、否応なしに同時に「増幅」されていった。それを目の当たりにして、ふと日本人もアフリカ人も同じくらい興奮していることに、錯覚かもしれないが、なんだかうれしくなってしまった。

そして、この日本人たちは多分家でテレビを見るよりも、赤の他人の大勢と一緒に興奮したくて、予約して二〇〇〇円払ってやってきたわけだが、より正確には、皆、自分の意志ではなく、何かによって興奮させられるのを期待してやってきていたに違いなかった。同様に、コートジボワール人たちも、この企画でもうけようとかくらんだ一部の者以外は、やはり同様の能動・受動未分化状態で興奮を求めているに違いない。

試合後、客の大半はそそくさとクラブを去っていったが、それは日本が負けたからなの



か、それとも単に「ゲームオーバー」だからなのかはよく分からない。それよりもっとなどなのは、このイベント自体「人間」にとって一体何だったのか。ロックのライブコンサートで圧死しそうになったり、ダンスホール系レゲエ・クラブの性暴力的ダンスをやりすぎて怪我をしたり、あるいは鳥越神社の神輿が宮入するのを見届けるためだけに暴力的に押し合ったり、国立のペンテコステ教会で異言や集団的恍惚が発生したり、それに大久保での在特会によるヘイトスピーチ・デモに対してしばき隊が暴力的に脅しに出たり、また海外では、カイロのタハリール広場、イスタンブールのゲズイ公園、ニューヨークのウォールストリート、そして、台北の国会の占拠、さらに言えば、すし詰め満員電車内の不快に耐える「苦行」、体を張ってやっているという点は似ているが、それぞれ違うのか。何がそこで生成されているのか。既成の説明を一時停止し、人類学的問いとして「情動」がどう絡み合っているかに注意して問うこと、それともそんな問いは無意味なのか。

〔佐久間…その後、「上記のほかにも、この班では以下のような事例を「情動」問題として取り上げる予定」と書いてありますが、こちらの方は列挙してある形なので、後でお読みください。その段落は飛ばして、その後の「研究上の留意点」というところから続けて読みたいと思います。〕

研究上の留意点…「情動的なるもの」はこれまでも、そして、これからも扱い難い研究テーマであり続けるだろう。その理由の一つとして考えられるのは、「情動的なるもの」を「理性」と対立するもの、あるいは制御されるべきものとしてきた歴史が続いてきたからだというものである。つまり「学知」の対象にすることは同時にそれを支配することになる。この階層化は、しかし、タラル・アサドによれば西欧中世以前にはなかった。

For example, see Asad (1988: 84) for the medieval monastic conception of *gestus* which 'brings together what later centuries were to separate sharply: cognition and affect.'<sup>※</sup>

※ Akira Okazaki, "Making sense of the foreign: Translating Gamk notions of dream, self and body" T. Marambaio & B. Streck (ed.) *Translation and Ethnography: The Anthropological Challenge of Intercultural Understanding*, The University of Arizona Press, 2003

Asad, Talal 1988. Towards a genealogy of the concept of ritual, in James and Johnson (eds.) *Vernacular Christianity*, Oxford: JASO.

これ以降のデカルトをはじめとする西欧のエピステーメーの末端に位置する諸学の一つである人類学が「認識」と「情動」の未分化の状態に戻ることはできないし、もしできたとしてもそこには研究対象として「情動」はまだ存在しないことになるかもしれない。しかし、このことに留意して調査・研究することは、困難を伴うが、できるかもしれない。

これと似た困難は感覚についてもいえるだろう。例えば「感覚的経験をめぐる人類学」といつても、感覚から知覚・統覚・認知・記号・言語へ、あるいは感性から悟性・智性・理性へ、あるいは直感からカテゴリ認識・統合・理論へ、あるいは *feeling* から *thinking* へ、身体から精神へという近代西欧哲学的段階区分は、「生理学的」「心理学的」事実という前に、進化論的で植民地主義的な言説として階層化されているので、その区別（差別）の問題を念頭に置いて「感覚」について再考するしかない。

どうして「学問」をやるような環境にいる者は「感覚的」経験を「知性的」経験から明確に差別しようとし、前者が後者より劣位にあることを自明視したがるのか（どうしてYouTubeを見るより本を読んでいる方が尊敬されるのか！）。ところが、その同一人物は現実世界ではそのような区別を絶えず明確化しながら生きているわけではない。その境界は多分極めて曖昧なままだ。そこにさらに視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚などはつきり階層的に (David Howes (二〇〇三)) によると人種差別的にでもある)\* 区別しようとしても、なかなか収まり切れない諸感覚の間で働いてしまう曖昧な共感覚作用や、記号・言語・記憶・統合などの領域で文化的学習記憶として働く曖昧な作用も加わる。

実は誰もが、意識しているかどうかはともかく、このように曖昧で区別しがたい「感性／知性」「身体／精神」に頼って生きているのではないか。とりわけ人類学的フィールドワークでいう *Participant Observation* は、自分の感覚・直感・身体能力と学習に基づく知覚・認識・統合能力とを総動員しないとうまくいかない。だから「感覚的経験」を抑圧したら「人

\* Howes, David 2003. *Sensual Relations: Engaging the Senses in Culture and Social Theory* Ann Arbor: University of Michigan Press.

類学的フィールドワーク経験」自体がおかしなものになってしまうだろう。

また、「感覚的」経験は受動性 (passivity)、「知的」経験の方は能動性 (agency) が強いとされる点も再考すべきだろう。両者は実際には固定的なものではなく、六本木のクラブのサッカーファンのように、程度の差こそあれ、誰もがその曖昧な相互作用のプロセスにあるのに、ネオリベ的人間観では前者は無視される。

このような傾向にある世界で「情動なるもの」を研究する場合、あまり哲学化・抽象化したり、論理操作でごまかしたりしないよう気を付けた方がいいかもしれない。

〔佐久間：最後の参考は飛ばさせていただきます。以上です。〕

(西井) どうもありがとうございます。では、久保さん。

## 1-2 アート、宗教、生成

久保 明教 (一橋大学)

一橋大学の久保です。岡崎先生が来れないということで、昨日この原稿を僕も読ませていただいて、岡崎先生と話し合って、僕の感想に対して岡崎先生がおっしゃったことも併せてコメントしたいと思います。

まず、この文章はワールドカップの話から始まっているのですけれども、僕としてはこれは今回のコメントの中心にしようと思っております。なぜワールドカップが世界中の人々を興奮させるものであって世界最大の祭典だと言われるのかということを考えてときに、一つは、サッカーというスポーツは動作が最適化されにくいということがあります。野球やバスケットと比べて、どういう動きで、どういう行為ができるのかということに自由度が多



くて、その結果、各地域に固有の身体性やリズム、感情表現、あるいは他の人間とどう一緒に動くのかといった、それぞれの違う動きがピッチ上にさまざまな仕方では表現されるということだ。

例えば、これは岡崎先生とも話したのですが、ブラジルのサッカーを語るときによく言われるジンガという、独特のリズムというか、体の動かし方に関する概念があつて、それはサッカーだけではなくて、カポエラやダンスなどに共通する概念として使われています。そういった身体的な表現や、動き方と結びついた連動性といったものが非常に最適化されやすいスポーツの多い、例えばオリンピックのような競技大会と比べて、サッカーの場合、知識がない観客でも、自分にとって馴染みのある、あるいは馴染みのない身体表現によって著しく感情を触発されるということがあります。emotion と比べると、affect という概念には、人を巻き込んでいって触発していくというニュアンスが結構あると思います。西井先生が発表の中で「意識や主体を超えて、フィールドに共存する身体が互いに影響し合うことで生み出される反響関係に焦点化するための概念が affect である」と言われていますが、この言いはそのまま、サッカーにおいて観客が干渉し、巻き込まれるもの、そういった反響関係がいろいろなる人を巻き込んでいく力を持っていると言えるのではないかとということです。

日本代表とコートジボワール代表の試合でも、日本の観客は、日本代表のプレイによって、自分たちに馴染みのある動き、あるいは感情表現、あるいは人との体の同期のさせ方といったものを非常に強く感じると同時に、自分たちにとって非常に異質なこういう動き方もできるのだ、こういうつなぎ方ができるのだということを見ながら、そこに自分たちの応援を通じて身体表現をつなげていくことで、そこに差異を持った多様な affection が起ります。

ここまでの話は、人類学者がサッカーについて語るときに非常に定型的な言い方でもあったわけで、有名なところでは今福龍太さんがサッカーについて書いているときにはこういう

言い方をしていたと思います。

こうした情動の集合的な発現に対して、人類学なり、研究者がどういう記述ができるのか。岡崎先生の書き方では、認識と情動、あるいは感覚的なものと知的なものという対立、むしろ階層関係ですね。知的なものが感情的、情動的なものを制御してきて、それに対して、むしろそういった制御関係、階層関係を排して見ていこうというのが多分岡崎先生の見方であって、そういった知的な枠組みの中に押し込めてしまうことが学問にも可能性としてあって、それをできるだけ避けるべきだと。そういうニュアンスが感じられるメモであったと思っています。

その具体的な表れとして、最後の方に「ネオリベ的人間観」という話があります。感覚的経験と知的経験といったときに、誰もがその曖昧な相互作用のプロセスにあるのに、ネオリベ的人間観では前者の感覚的経験が無視される。「このネオリベ的人間観とはどういうものですか」と岡崎先生に聞いたところ、一つは経済的な制度の問題でもあるけれども、同時にギデنزが「再帰的プロジェクトとしての自己」という概念で語ったように、自分のやっていることの行為の動機や目的や、それがどれぐらいうまくいくかということを常に自分で形式化して、標準化した形で理解して、他者に伝えて、それに専門家からのアドバイスなどを受けて、そこで自分が作っていったいく。そうした場合には、感覚的経験の受容性ないし能動性、あるいは *affection* における集合性は無視されるという言い方をしているんじゃないか。

ただ、僕はそれは今現在のあり方として、つまり知的な枠組みの一つの具体的な流れとしてのネオリベリズムやグローバル化といった現象、あるいは僕はもともとコンピュータ技術と人間の生活についての研究をしています。そういった現在の知的な枠組みの現れに対して、果たして情動はそこまで抑止されているだけなのか、排除されているだけなのかとい

うことをコメントの本線にさせていただきます。

あとはそんなに長くはないのです。例えばネオリベリズム的な人間観、あるいはオーディット・カルチャーのような、常に自分を監査していつて、自分は何をやりたいのか、何ができるのかということや他人に開示していくといったやり方が、果たして情動的なもの、あるいは熱狂的なもの、感覚的なものに対して、それほど排他的であるのかということです。

一つ、僕が今日ちょっと考えていた例は『おおきく振りかぶって』という高校生を主人公にした野球漫画があるのですけれども、今までは天才ピッチャーや天才バッターみたいなものを中心にして描かれてきた野球漫画に対して、この漫画は、選手同士の感情的なつながりをどうやってチームとして一つの力にしていくのかということやテーマにして、今までの王道のスポーツ漫画と全く違う形で作り直して非常に人気を得ている漫画なのですが、その中で、一話まるごと全てオーディットのものがあります。つまり、それぞれの選手に「あなたの今後の目標とそれをやるための努力と見込みを書きなさい。それを今日と一週間と一年と一〇年と三〇年で全部書け」と言います。それを一〇分でみんなが書く。その後にそれを監督が見てから、もう一回それを五分でやる。三分でやる。これだけで一話になっていて、これによってそれぞれの野球にかける思いみたいなものがどんどん活性化されていくのです。それぞれの選手がどのように考えているのかをお互いに見ることによって、それぞれの感情と情動的なつながりが現れていくといったようなことで、それは単純に青春漫画としてうまくできています。

サッカーの話に戻しますと、九〇年代以降のボスマン裁定で選手の自由化がなされた後、選手のグローバルな売り買い、あるいは育成が基本になったことで、戦術が平均化され、標準化され、均質化されていきます。ただ、ジダンや、クリスティアーノ・ロナウドなどもそうなのですが、それぞれ全く違う身体性を持っている選手の多様な組み合わせによって、そ

れを標準化された戦術と先端の戦術といかに組み合わせるかによってチームの強さが出てくる。

それと同時に、プレーが持つ affection 自体が商品価値を持っていきます。例えば九〇年代末ぐらいから世界的なビッグクラブはユニフォームを売ったり、ビデオを売ったり、スローモーションでビデオで撮れるようになります。そうすると、それぞれの選手の非常に独特のリズムといったもの自体が、世界中の子どもたちにユニフォームを売るための非常に大きな商品価値を持つものに変わっていくわけです。その結果、戦術の変化とも相まって、新しい形のファンタジスタと呼ばれる選手たちが出てくるのです。

つまり、サッカーの議論だけではなくて、ネグリとハートが『帝国』で論じているように、九〇年代以降に盛んになっていくグローバルな非物質的労働の広まりの中に、情動を操作し、新しく生み出して、人々をつなげていくことで経済的な価値を生み出していくような動きがあつて、今のワールドサッカーのあり方は基本的にそういうものと非常に近い、その中の一つの例だと考えられると思います。

今回の二〇一四年のワールドカップで出てきているのは、戦術という知的な側面においては、各国のサッカーが非常に均質化されて、ほとんど差がない状態になっています。それは先ほど言ったような九〇年代以降のグローバル化の結果、ほぼどの国の代表もヨーロッパの先端のクラブチームで行われている戦術を自分たちのものにしていきます。これが今までどの圧倒的な違いとして見て取れることだと思います。ただ、同時に各国が展開するサッカーが触発するもの、affectするもの、多様性は、むしろ戦術の標準化によって際立って表れているとも見ることができます。それぞれが今の先端的な標準化された戦術をそれぞれのリズムやそれぞれが持っている affection の中で解釈し直していく。そうすると、結局、そこでの争いは逆にもものすごく多様なものになっていって、単なる標準化とは言えないということ

です。

これは僕が前から考えていることでもあり、ちよこちよいろいろなところで言っているのですが、標準化、あるいは言語への還元、あるいはグローバルなスタンダードな基準への還元と、それに対して情動的なもの、感情的なもの多様性を対立的に考えるのではなくて、むしろ今のグローバルな標準化の動きは、情動の多様性を活性化させ、それに関わり、それをうまく利用して促進されている。だから、そこでどのように標準化の方が動くかというのは、*affection* 次第だということです。情動的なものが集合的にどう動けるかということ次第になっていて、そこで相互作用が常に起こっているのです。だから、還元の外にある多様性を考えるのではなくて、むしろ還元を通じてどうやって多様性が新しく出てくるのかということを考えるために、情動に注目するということはできないのではないかと考えたということです。

具体的には僕はインドのIT産業で、あれは本当に感情労働の代表例として言われている、そこでいかに還元を通じて多様性が出てくるのかということを考えているので、発表することがもしあったりすると、そういう話をしたいたと考えています。すみません、ちよつとオーバーしました。

**(西井)** 久保さん、ありがとうございました。急遽、岡崎先生の代役として二三日前に依頼して、コメントを準備していただきました。

では、田中さんのご発表をお願いしたいと思います。田中さんの発表が終わってから休憩を取らせていただきます。



## 2 身体・エロス

田中 雅一（京都大学）

（田中） それでは始めたいと思います。田中雅一です。よろしくお願ひします。ほとんど皆さんにお配りしたパワーポイントを印刷したレジュメと同じですが、少しだけ変えてあります。

### はじめに

まず、エロスの領域の情動を考えることの意義、つぎに、ちょうど久保さんがおっしゃっていた感情労働、さらに「官能労働」、最後に誘惑の話をして終わりにします。

成果としては『ミクロ人類学の実践』（田中雅一・松田素二編、世界思想社、二〇〇六年）という論文集になったのですが、その基になった研究会は「主体・自己・情動構築の文化人類学的研究」ということで、情動という概念が入っていました。emotionをきちんと訳すと感情より情動の方がいいと判断して情動を使っています。

当時の問題意識は、『ミクロ人類学の実践』の序論に書いていますけれども、「真の人間」とは、ヨーロッパ的な個人、理性的な存在が想定されていて、そこから理性に対する感情（情動）や精神に対する身体、文化に対する自然という非対称的二項対立が認められる。これが人類学的な実践にどんな意味をもっているのか、考えてみましょうということでミクロ人類学を提案しました。こういう二項対立的思考においては、自己に対する他者を必要とします。それは、ヨーロッパ人に対する非ヨーロッパ的な他者、あるいは理性的な男性に対する感情的な女性でもいいです。ヨーロッパ男性のアイデンティティーを確立するために非対称的な



他者が必要なのです。他方で、そうした二項対立が自分自身を分裂させてしまいます。

もう少し具体的に述べると、例えば未開人と呼ばれていた他者は感情的で、身体、環境に大いに左右され、また、非合理的な慣習に縛られている社会的な存在とみなされる。未開社会においては、個人の自由はないのだということになる。さらに言えば、自己とは観察する能動的主体であり、他者とは観察される受動的客体である。

では、このような二項対立を乗り越えるには、単に逆転すればいいのか、理性対情動から、情動対理性という風に情動を優先すればいいのかという疑問が出てきます。

もう一つの問いかけは、こうした二項対立そのものを批判的に捉えるべきではないのかということです。例えば対立させるのではなく、混交しているという視点から情動的理性みtainな考え方を出せないでしょうか。アルフレッド・ジェルの *distributed personhood (Art and Agency)* という概念や、菅原和孝さんたちがやっていた *embodied mind* (菅原編『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』世界思想社、二〇一四年)、アーサー・フランクの *communicative body* (Frank, Arthur 1991, *For a Sociology of the Body: An Analytical Review*. In M. Featherstone, M. Hepworth and B.S. Turner eds. *The Body: Social Process and Cultural Theory*. London: Sage Publications) など、他にもあると思えますけれども、こういった概念から二項対立を揺るがす可能性があるのではないかと考えます。

『癒しとイヤラシ』(筑摩書房、二〇一〇年)という本で、私は能動的な受動性や、受動的な能動性という生き方を提唱しています。特に身体的存在は、そもそも受動的なものなのです。ましてやその受動性においてこそ真の快楽ではないかということ、この書物で論じています。エロスには能動的受動性、あるいは受動的な能動性が可能な関係であり、反エロスはある意味で他者には受動性しか許されていないような状況と違っていいのではないのでしょうか。たんにエロスの方が気持ちいいことをやって、反エロスは痛みや苦痛だというわけでは

ないということです。

では、具体的にどんなことを考えているのかということですが、フォーコーの伝記から引用したいと思います。ジェイムズ・ミラーがフォーコーにインタビューした記録の翻訳（ジェイムズ・ミラー『ミシエル・フォーコー——情熱と受苦』、田村俶他訳、筑摩書房、一九九八年）です。

あなたはそこ〔バスハウス〕で人と出会うわけですが、その人とあなたとは対等の関係にあります。快樂との組み合わせが可能であり、また、快樂を生み出すこともできる身体以外に何もない。あなたは自分の顔、自分の過去、自分のアイデンティティーへの幽閉から脱却するのはです。実際、素晴らしいことではないでしょうか。昼夜を問わずいつまでも力を持っている。想像し得るあらゆる慰めとあらゆる可能性が備わっている場所に入り込む。そして、そこで触知可能でありながら、同時に補足しがたい身体と出会うということです。こうした状況では自分を脱主体化する、自分を脱支配化する、そして、自分を脱性化する、脱性器化と言った方がいいかもしれませんけれども、希有な可能性が存在します〔ミラー 一九九八・二七七―二七八〕。

つぎに別のインタビューです（ミシエル・フォーコー「ミシエル・フォーコー、インタビュー性、権力、同一性の政治」西兼志訳、『ミシエル・フォーコー思考集成一〇倫理・道徳・啓蒙』筑摩書房、二〇〇二年）。非常に似ていますので紹介します。

この性的実践のS M的な運動が、私たちの無意識の深奥に潜むサド・マゾ的傾向の解明や発見と何らかの関係があるとは思いません。大事なのは、私たちは、S M的实践をしているゲ

イの人たちが、身体の奇妙な部分を使い、身体をエロス化することで、快楽の新たな可能性を開発しているのだということをよく知っています。私の考えでは、そこにあるのはある種の創造的な企てであって、その主要な特徴の一つは快楽の脱性化、脱性器化、性器を中心とする快楽を脱すると私が呼ぶものです。

ミラーは、「参加者の多くはイクことに関心がない。むしろ二人の間の精神的な距離の方が重要である、友愛というようなものがそこで大事なのだ」と説明しています。性は身体的実践だが、それだけに終わるものではない。性を通じて脱性器化が生じます。

### 感情労働と官能労働

エロスの文脈で情動はどのような役割を果たすのか。このような問いを念頭に私は感情労働というものに注目してきました。情動というのは、理想的な形は能動的受動性や、ここで言う受動的能動性を表す人間と他者、あるいは自然やものとの関わり方の一つです。しかし、同時に情動はコントロールが必要です。このコントロールとの関係で感情労働という概念を考察したいと思います。

感情労働という概念を提案したホックシールドという社会学者は、これと感情作用を区別しています（ホックシールド、アーリー、R. 『管理される心』世界思想社、二〇〇〇年）。後者は日常生活で実践している情動のコントロールです。前者は主としてサービス産業においてサービスを提供する側に求められる情動のコントロールです。特に第三次産業、すなわちサービス産業に携わっている人たちの感情のコントロールは、サービスの一部です。感情労働を行う人は自分の感情を誘発したり、抑圧したりしながら、相手の中に適切な精神状態を生み出そうとします。ホックシールドの研究対象は客室乗務員ですから、懇親的で安全な

場所でもてなしを受けているということ安心感や快適さを乗客に持つてもらわなければならない。それは、航空会社のイメージを高めることにもなり、結果としてリピーターの増加、そして収益の増加につながります。したがって、感情労働は個人的な問題ではないのです。このため、服装や表情、乗客とのやりとりについて細かい指示や規定が作られています。

感情労働は一種の演技です。ホックシールドは表層演技と深層演技に分けています。表層演技は、心では「何だ、こいつは」と思っているのにこつと笑っているという場合で、深層演技は、「私はここではあまり悲しくないけれど、悲しまなければならぬ」と思って、自分の親が亡くなったときのことを思い出して涙を流すことです。わざとではなくて、職業的な要請から本当にそう感じなければならぬ場合です。

私は、感情労働をキーワードにセックスワーカーの研究をしてきました。そこで、私は、官能労働という概念を提案しました（田中雅一「「やつとホントの顔を見せてくれたね！」日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」『コンタクト・ゾーン』第六号、二〇一四年）。これは感情労働すなわち *emotional labor* に対して、*erotic labor* です。官能労働とは、自分の性的快楽を誘発したり、抑圧したりしながら、相手に適切な快楽を生み出すための演技です。観察可能な表情と身体的表現を作るために行う快楽の管理です。

まず、セックスワーカーへのインタビューからいくつか事例を紹介します。

最初は感情労働の事例です。話をしてくれたのは、一〇年以上セックスワークに従事している三〇代の女性です。彼女によると、顧客の「奥さんはこの人を愛したのだな。どういふうに好きになったのかな」ということを考えて、自分自身が奥さんになった気持ちになるということ。そうすると、顧客にも喜ばれるし、自分もある意味でお客さんと関係を持つのが楽なのだ述べています。奥さんのように「私にもこの人を愛せるかもしれない」。こ

れは深層演技と考えられます。これによって、顧客は再び彼女を指名するかもしれません。つぎの事例です。やはり三〇代の女性はこのように述べています。「よく、体は売っても心は売らないと言うけれど、それは売ったことがない人の言うせりふです。確かに心は売っているわけではないですけども、でも、むちゃくちゃ心を使っています。心を使いながら時間を売っていて、心を使わないとつらくてやっていられない。心を守るために心を使うしかない」。これも一つの感情労働のあり方だと私は理解しています。

官能労働の場合は、ほとんど演技です。

ふりは呼吸をするように自然にやっている。負担ではないです。初めの頃は、そこはすごく戸惑いを感じたり、ハードルがあったのだけれども、今は自然にできるようになりました。

ある女性は、「もう、お金、お金だと。全とお金で、「一日に相手をする顧客の人数が多い」と痛いけれども、気持ちがいいというようなことも言っているということです」と述べています。

感情労働も官能労働も、他者との関係で私たちが自分の感情をコントロールし、関係をうまく維持しようとするときに認められる実践（感情作用や官能作用）に通じます。他方で私は、こうした演技が崩れるときにも関心を持ってきました。二〇一二年六月二三日に広島大学で開催された第四六回日本文化人類学会研究大会で「客を叱りつける女たち」というテーマの分科会を組織しました。叱りつけるというのは、感情がコントロールできなくなることを意味します。つまり、演技の秩序が崩れるわけです。そこに、ふりではなくて、素というものを出てくる。でも、それがまた気に入られてさらなる商品化を生むということです。

これは官能労働の場合ですが、ある客は、女性が何度かイッたふりをしたら、「やっとホントの顔を見せてくれたね」と喜んだそうです。まさに演技と素の表出とのかけ引きがエロティックの場面で生まれている。顧客がセックスワーカーに求めるのは、性的快楽だけではなく、素に接することができるという思いです。演技をしなくてもいいのがエロスの世界なのだという幻想もあります。顧客はセックスワーカーとならまさに裸の付き合いができるのだと思うわけです。でも、実際には、セックスという場面においてこそ、私たちはジェンダーの規範を守らざるを得ないような状況に何度も出くわしていると思います。そして、そのようなかけ引きや期待、あるいは幻想は、お客さんとセックスワーカーの間だけではなく、通常のセックスにおいても認められるのだということを経験したいと思えます。

もう一つ注意したいのは、顧客も、「ここだったらおれは演技をしなくてもいいのだ」というつもりでセックスワーカーに接しているかもしれないということです。日常的な場面ではジェンダー規範に従って演技をしなければならない。しかし、それはセックスの場面ですらつらいことでもありますから、お金を出すことによって自分の素顔を出してもかまわない場所を確保しているのだと考えられます。

### 誘惑論

さて、以上の議論をもう少し一般化すると、誘惑という概念に関係してきます。誘惑は、受動的能動性や能動的受動性を考える上で、非常に重要な概念です。立川健三は、「誘惑するとは、積極的に他者に働きかけることではあるけれども、にもかかわらず、他者に従属した弱い立場に立つことである」（立川健三『誘惑論——言語としての主体』新曜社、一九九一年、三九頁）と述べています。また、ボードリヤールは「誘惑とは、弱点を攻めるようにと他者に呼びかける挑発なのだ」（ボードリヤール、ジーン『誘惑の戦略』宇波彰訳、

法政大学出版局、一九八五年、一一〇頁）と言っています。言い方を変えれば、誘惑者は他者に能動的になれと働きかける。つまり、誘惑者自身が相対的に受動的になるといふ働きかけなのです。さらに、誘惑には、身体や情動の偶発性（コントロール不可能なモード）が密接に関係しています。

一方で、誘惑には能動的な操作性あるいは戦略性というものも想定できます。菅原和孝さんは『ブッシュマンとして生きる』（中公新書、二〇〇四年）で「私の欲望の向かう相手が、私のことをどう思っているかは未知だ。それを私ためらいがちに相手に働きかけ」、「相手から返ってくる応答を徴候的な手がかりとして、私は相手の心の中に私に向かう同型の欲望を読み取るうとする」と述べています。同じような戦略性は、日本語では「口説く」というような言葉にも認められると思います。

以下に二つだけ事例を出しておきます。

一つは岩井志麻子の『魔羅節』（新潮社二〇〇二年）の中の「淫売監獄」からの引用です。主人公がトヨに言い寄るときに、彼女は返事をしてしまった。「しかし、返事をしてしまったことで、トヨは生々しい獣の死骸でもなく、干涸びた蛙の死骸でもない、瘦せて飢えて幼い、それでいて女の匂いを立ち上らせる『トヨ』という娘となったのだ」と岩井は書いています（二六九―二七〇頁）。これはまさに呼びかけによって主体化（従属）されると見えますけれども、同時に女のおいを立ち上がらせる身体に岩井は注目し、そこに、トヨの能動性を示唆しています。それは彼女の思いとはほとんど関係のない身体の偶発性から生まれる受動的な能動性です。

もう一つは、私の同僚の大浦康介さんが数年前に出版した『誘惑論・実践篇』（晃洋書房、二〇一一年）です。そこで彼は社交ダンスを論じています。社交ダンスでも自他の問題が非常に曖昧になっていく。引用します。



とくに社交ダンスの場合、踊っていてパートナーと「呼吸が合う」瞬間というのがあります。……誰が誰をリードしているのか分からなくなるといよりは、自分は相手であり、その相手は自分であるから、自分は相手であるところの自分であるといふこととなるけれども、その自分は相手であるわけだからと、メビウスの輪のような迷路に入り込むのです。一種のめまいにも似た感覚ですが、これがあるからダンスはやめられない【大浦二〇一・二二―二三】。

これも一つの誘惑のめくるめく展開だと思います。

先にフーコーのインタビューを引用しました。そこに「アイデンティティーの幽閉からの脱却」という言葉がありました。それは私人の履歴を消すということです。そこで主役になってくるのは身体です。大浦さんは、考えているのは身体で、体が表情を作る。脚と脚が対話すると述べています。そこにあつて、そこにはない身体、捕足しがたい身体というのがフーコーの先ほどの引用に出ていましたけれども、大浦さんは、自分の身体が今度は「他者の棲み家」になるのだというような言い方をしています【大浦二〇一・二八】。

### おわりに

エロティックな状況を抜きにして情動を論じるわけにはいきませんし、エロティックな場面を考える際に誘惑という概念を無視するわけにはいきません。たしかに、誘惑や誘惑者は通常否定的に捉えられています。危険で、不気味なものとしてみなされたり、あるいは排除の対象になったりします。誘惑者は、他者を支配する反エロスのエージェントになり得る存在です。反エロスの状況での拘束を避けるため、お馴染みの禁欲主義的な世界観を積極的に受け入れることになります。しかし私たちは、受動的な能動性や能動的な受動性の可能性

を肯定し、情動研究の人類学史における意義を確認するなら、エロティックな世界に導く誘惑者は実に非常に重要な存在であることは明らかです。

(西井) どうもありがとうございます。それでは、コメント等はまた後でということ、いったんここで休憩を一〇分ほど取ります。次は四〇分から、三番目の床呂さんのお話を開始したいと思います。

後半 (01:26:59 ~)

(西井) 実は、先ほど始まるときにご説明すればよかったのですが、今日の公開シンポジウム「情動と社会的なものの交叉をめぐる人類学的研究」は、今度の秋に大型の科研を出すことを考えていまして、その準備の一環という面があります。それで、人によっては次の床呂さんも何々班みたいな形でもししたら言及されるかもしれませんが。今のところはまだ完全にこれだけと固まっているわけではないのですが、今日のところはそういう主要なトピックスについて話していただくということで考えております。

では、時間も押していますので、床呂さん、よろしく願います。

### 3 非人間—もの・技術

床呂 郁哉 (A A 研)

(床呂) どうもありがとうございます。A A 研の床呂と申します。よろしく願います。ハンドアウトは、先ほどご説明いただきましたが、要旨の他に私は別の配付資料が全部で三

枚ぐらいありますので、そちらの方もお手元にご用意いただきながらお聞きください。ただ、基本的にはパワーポイントのスライドに沿ってお話をさせていただきたいと思えます。

私の話は、タイトルがプログラムにはなかったのですが、「真珠貝に共感を覚えるとき―『もの』の人類学からの情動研究の可能性」ということで、今、西井さんの方からご説明があったように、将来情動に関する割と大きな研究プロジェクトを西井さんを中心に立ち上げる予定です。その中で私がご指名を受けたのが非人間、non-human に関する研究ということなのですけれども、「もの」や技術に関する班からの研究構想案ということでお話をさせていただければと思います。よろしくお願いします。

まず報告の概要と、初めてお会いする方も結構いらつしやるのではないかと思いますので、ごく簡単に自己紹介をさせていただきたいと思えます。今回の報告は、先ほども少し言いましたけれども、「もの」、もしくは non-human things といいますが、非人間の対象からの情動・感情研究との問題提起というか、接点を少し探っていききたいというのが全体の大きな問題意識としてあります。

ごく簡単に私の自己紹介させていただきますと、もともとは東南アジア島嶼部のムスリム社会におけるイスラムや宗教、国境を越えた移動といったことを研究してきたのですが、七、八年ぐらい前から、「もの」研究と題して、『もの』の人類学的な研究」というタイトルのプロジェクトをA A研の共同研究プロジェクトとして実施させていただきました。通称「もの研」といいますけれども、現在も実は、もの研の第二期が続いております。もの研のプロジェクトの詳しい説明をする時間は到底ないので、ごく雑ぱくに申しますと、アジア、アフリカなど、各地の広義の物質文化、あるいは「もの」、非人間の存在者に関する人類学的な研究ということなのです。

詳細に関しては、今、写真でご紹介していますが、京都大学学術出版会から出版された



『もの人類学』という成果論集の方をぜひご参照いただければと思います。すみません、ちょっと宣伝めいてしまいました。

今回の話でいうところの「もの」とは何かという前提なのですが、人類学的ないわゆる通念的な物質文化研究 (material culture studies) が指すときの「もの」、物体というよりは若干外延が広くて、いわゆる人工物、artifactとか、通念的な文化人類学における material culture というときの物質と限定せずに、より広く、人間以外の存在者、例えば岩のような自然物、あるいは私も後で真珠貝の話を書きますけれども、人間以外の生き物、動物なども広く含むという概念として「もの」、non-human を想定しています。

「もの」研究の詳細は省きますけれども、今回の話の主題と関係するポイントだけ幾つかかいつまんでお話をさせていただきます。

「もの」研究の問題意識です。西井さんの冒頭のプレゼンテーションにもありましたけれども、脱人間中心主義的な「もの」観は可能かということを一つ問題意識としてまいりました。これはどういふことかといえますと、非常に雑ばくな話し方をさせていただきます。お許しいただきたいのですが、一つ仮想敵としては、ある種の近代西洋的な世界観、もしくは「もの」観ということを、乗り越えるべき対象として想定しています。近代西洋的な世界観や「もの」観は、われわれ「もの」研究の視点からすると、極めて人間中心主義的 (anthropocentric) な世界観ではないかと思うわけです。

こうした近代西洋的な「もの」観、世界観の中においては、まず人間 (human) と人間以外 (non-human) の間に大きな境界 (boundary) が引かれる。その境界がともすると固定化されていくということです。その境界が引かれた上で、前者の人間 (human being) に関しては、行為の能動性や主体性としてのエージェンシーや、広い意味でのもちろん情動や感情を含めた心を備えた主体として想定するということです。

それに対して non-human の側は、どちらかというところ、むしろ心なき客体、もしくは死せる物体とみなされて、人間の側のテクノロジーによるコントロールの対象、統御の対象としてみなされがちであるという傾向があるのではないか。これは先ほどお話を頂いた田中雅一さんが、あるところで「道具主義的世界観」という言葉を使っていますけれども、それがあつた種、通念的な捉え方としてあるのではないか。

これに対して、先ほどの「もの」研のプロジェクトでいろいろな世界各地をフィールドとしている人類学者の方にお話を聞いて見えてきた知見の一つが、人類学者が各地のフィールドで遭遇する人間と人間以外の non-human (自然物、人工物、生物を含む) との関係は極めて多様性に富んでいて、必ずしも人間と非人間が、通念的、近代西洋的な捉え方で考えられるほど、境界がはっきりしていないということです。言い換えれば、境界が可変性に富んでいたりする、あるいは両者がハイブリッド的に相互作用を行う、あるいはインタラクティブなことを決してあり得ない話ではないということが徐々に浮かび上がってきました。それが「もの」研の第一期の研究成果ということで、それを引き続き第二期でも検証しているということですね。

翻つて、さらに先ほど少しだけ言った近代西洋的な世界観における人間と非人間の境界の設定という話なのですが、これを思想的な文脈の中で、誰か一人代表的な論客というか思想家を挙げると言われれば、どうしても先ほどから、何回か言及されているルネ・デカルトの話をせざるを得ないのではないかと思います。デカルトは、ご存じの方だと思いますけれども、『情念論』や、驚きに関する感情の話など、彼自身は実は感情や情動に関するようなテーマのことも研究しているわけです。しかしながら、そこで言われている感情、情動は、あくまでやはりホモサピエンス、人間の話なわけです。

では、人間以外の動物についてデカルトが何と言っているかということ、それが配付資料の

一ですけれども、有名な動物機械論と言われる話なわけです。読み上げる時間がないので、適宜ご参照いただければと思いますが、要するに、動物が幾ら表面的にあたかも心や感情を持っているような振る舞いを見せたとしても、それは決して精神、心を持っている証拠にはならない。言ってみれば動物なんていうのは歯車とゼンマイでできた時計のような機械のような存在なのだということを行っているわけです。

この考え方は、デカルト自身というのもありますが、さらにデカルトの少し後のマルブランシユという機会原因論などで非常に有名な、やはりフランスの哲学者がいますけれども、彼を通じてより通俗化した形でヨーロッパ社会に普及していったということが言われています。マルブランシユに関しても資料一の後半に少し書いたのですけれども、非常に象徴的なエピソードが一つあります。

この哲学者、マルブランシユがあるとき街を知人と一緒に歩いていたら、雌の犬がうれしそうに寄ってきて、なついてきたわけです。それに対してマルブランシユは、じゃまだったのか、足で蹴っ飛ばしたのです。そうすると、当然、犬は悲鳴を上げてきゃんきゃん鳴きながら逃げていくわけです。まず、なぜそんなことをしたのかがよく分からないのですが、とにかくそれをそばで見ていた知人が非常にびっくりすると、その知人に対して「あなたは知らないのですか。犬というのは別に何も感じていないのですよ」と言ったということです。すなわち動物の鳴き声は言ってみれば機械の歯車が軋んだノイズのようなものであって、ここに決して感覚、痛み、あるいは感情を認めて共感する対象ではないのだという考え方がある種象徴的に現れているということです。ただ、これは先ほどの「もの」の人類学的な、ある種、通文化的な比較研究の視点から言うと、極めて特殊な、西洋近代的な捉え方とも逆に考えられるのではないかということです。それが次の話の「人間、非人間境界の可変性とそこにおける情動」ということなのです。

次の話は、恐らくこの会場にいらつしやる大半の人類学者の方にとってはほとんど常識的な話なので、あらためて詳しく説明するのも何だということもあるのですが、一応少し言っておきますと、非西洋社会、もしくはヨーロッパでも前近代社会においては、非常に広く動物を非人間ではないということで切り離して、境界を引いて、除け者にするというだけではなくて、人間と全く同じではないにしても、ある種、対称性、同等性、親近性を持ったような存在として扱っています。例えば飼っている動物が死んだら埋葬するとか、ある種のアニミズムやトーテミズムというように、場合によっては、あたかも人間と同じように動物と相互交渉したり、あるいは先祖であるとみなすような考え方があるということは、あらためて紹介するまでもなく、と言いながら資料二で紹介していますけれども、いろいろあると思います。

それから、ヨーロッパの文化圏においてすらという言い方をしているの分かりませんが、ヨーロッパにおいても動物に靈魂、あるいは知能、あるいは広い意味での心を認めていこうというような系譜も、子細に見るといろいろ存在しているということも、歴史学者や思想史家の間ではよく指摘されているところかと思えます。これも詳しい説明は省きますが、例えば代表的なもので、古代ギリシャの有名なアリストテレスの動物靈魂論というような発想の系譜です。

個人的に私が面白いなと思うのは、中世ヨーロッパ、それから近世初期ぐらいまでは、動物裁判があったのです。これはご存じの方も結構いらつしやるのではないかと思います。中世ヨーロッパでは、例えば豚が畑を荒らしたり、犬が誰か人間にかみついたりということをすると、その罪に応じてちゃんと捕まえられて裁判にかけられたのですね。必ずしも一方的にかけられたというだけではなくて、場合によっては住民がお金を払って弁護士が付いたり、裁判の結果、無罪になることもあったりしたと言われています。

#1

今スライドで見えていただいているのが中世で行われた動物裁判の様子を描いた版画です。豚が被告席で裁かれて、検察と弁護側に分かれて裁判がされたということが史実としてあり、大真面目にちゃんとやっていたということが歴史学者の間で指摘されています。『動物裁判』という、中世史の池上先生という非常に有名な方が書いた本も残っています。

それは中世までの例ですけども、現代の欧米を例に取っても、例えば人とペットの関係を考えてみると、例えばアメリカに行くと、皆さんもご存じかもしれませんが、ペットセメタリー（ペットのお墓）が結構あるのです。それから、「ペットロス」などという言葉がかなり日常化しています。すなわち、自分が飼っているペットが死んだら、自分の人間の家族が死んだときと全く同じとは言えないかもしれないけれども、かなり近いような喪失感や悲しみ、悲哀の感情や情動を感じるということが言われたりしています。

以上がどちらかという文献からのもので、別に私自身のオリジナルリサーチに基づくものではないのですが、ここからは、せっかくですので私自身のフィールド調査の事例を紹介したいと思います。「もの」研究、非人間の事例からということで、真珠養殖現場の民族誌的研究の事例をご紹介します。

#2

写真で見えていただいているのが養殖場の人工採苗施設の一つです。私は七、八年ぐらい前から、日本、あるいは東南アジア、オセアニア、それから、この間は中東、アラブ首長国連邦にも行ってきたのですが、世界各地の真珠養殖の現場に行つてフィールドワークを行つていきます。



#3

各地の養殖場でいろいろ様子は違うのですけれども、これは割と大手の日本の長崎県の壱岐対馬の壱岐にある養殖場の内部です。その人工採苗施設です。人工採苗施設とは、ごく簡単に言うと、貝を人工授精して子どもを作って、生後一〜数カ月ぐらいまでの貝を飼育する施設です。これは大変な技術と資本力がかかるので、どこの養殖場にもあるわけではなくて、比較的大手の養殖場の人工採苗施設です。

特に日本企業の真珠養殖の現場では、現在では非常に最先端のテクノロジーを駆使して、例えば一つ一つのフラスコの中でプランクトン状態の稚貝を育てたり、その餌になるプランクトンを飼育したりするのですが、その水質、水温、栄養をコンピュータ制御で二四時間管理しています。

それから、品種改良をしています。真珠貝を作ることによって、最終的には宝飾品の真珠を取り出すわけですけれども、きれいな真珠を作るためにバイオテクノロジーを駆使した品種改良を行っています。最近では真珠貝もヒトゲノムと同じように、全ゲノムの解析に成功したのです。ですから、どういう貝を組み合わせるとどういう色の真珠ができるかといったことが分かってきているということです。

余談ですが、特に人工採苗施設を含めた養殖場の研究は資本とテクノロジーの固まり、企業秘密の固まりで、本当に調査が大変で、私もこういうところでお願いと、普通は大抵けんもほろろに調査を断られるということが多いのですが、幾つか伝手をたどって調査をしています。

#4

こういうところに行くと、この写真からも感じ取れるかと思うのですが、日本の他の小規

模な養殖場の方が数としては多いのです。そういうところでは、じいちゃん、ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃんをやっている、三ちゃん農業ならぬ三ちゃん真珠養殖みたいな、すごく家庭的な素朴な感じでやっているところが多いのですが、大手はどちらかというとラボのような雰囲気です。大手の例えば製薬会社とか生物学の大学の研究室の実験室のような雰囲気に満ちています。

そこで最初のうちは私が調査して、こういうことかなと思ったのは、まさにそこで対象となる真珠貝は、先ほどのデカルトの動物機械論ではないのですけれども、人間のまさに最先端のテクノロジーによる統御、コントロール、管理の対象です。そこで真珠貝が一見すると心なき客体として見られているのかなというような印象を、初期の段階では少し持ったわけです。言い換えれば、今日のテーマで言うと、一見すると情動や感情なんていうものとは非常に縁遠い、むしろ正反対の世界なのかとも思いながら通っていたのです。しかしながら、何回もこういう人工採苗施設を含めて養殖場に通ったりするうちに、実は今言ったような印象は割と表面的であって、もちろんそういう側面もあるのですけれども、それだけではないということも見えてきました。そこで、次に言う共感の対象としての真珠貝という話をしたいのです。

#5

写真が二枚ありますけれども、上の方の写真にご注目ください。これは、先ほど言った稚貝、生後数週間ぐらいまでの子どもの貝を顕微鏡写真で撮ったものを、さらに養殖技術者の方が指差して私に説明してくれているときの写真です。

生後数週間まではミクロ単位で、肉眼では絶対に見えず、顕微鏡で見ないと見えないわけですが、こういうものです。こういう存在に対して非常に面白いと思ったのは、養殖

技術者の方がいろいろ説明してくれるのですけれども、インタビューの中で非常に特徴的なのが、こういう技術者の方が真珠貝、特に稚貝に対して、「こいつは本当に元気があってかわいい」「こいつはちょっと心配だ」といった語彙を使います。それは私に対して説明の語彙として使うのです。

私が観察している中で、彼らが夕方、養殖場からドアを閉めて家に帰宅するときに、帰る前に、まだ見えない貝に向かって「また明日の朝、無事に会おうね」「頑張れよ」といったことを呼びかけるんですね。どういうことかというところ、幾ら二四時間のコンピュータ制御といっても、やはりどうしても人間のモニターが少なくなる夜間のうちに、いろいろな突発的な要因によって、顕微鏡で見えるレベルの稚貝が死んでしまうことが結構あるらしいです。だから、非常に心配になる。朝、養殖場に着いて、採苗施設のドアを開けて、真っ先に顕微鏡でこういうものを見るのですが、小さい数ミクロンのものが顕微鏡の画面の向こうで動き回っていたりすると、「ああ、よかった、本当によかった、でかした」みたいなことを口にしたります。私もそういう言葉を現に吐いているのを目撃していますけれども、そういう語りかけをするのです。

## #6

今のは人工採苗施設の子どもの貝の話ですが、下の写真は、養殖場自体は別の養殖場なのです。同じ長崎県なのですが、佐世保にある佐世保真珠という業者さんです。これも割と大きい業者さんなのですが、その内部にかかっている職場のスローガンを書いた看板です。日本の中小企業などでも、トヨタとか大企業でも、こういう看板が入っていますけれども、一番上に「目指そう、世界に誇れるアコヤ真珠づくり」、これは普通と言えば普通ですね。そして五つぐらい項目があつて、三番以降は、整理整頓とか、挨拶しましょうとか、輪を大切に

にとか、他のいろいろな企業でもありそうなスローガンなのですが、面白いのは一番と二番です。一番が「アコヤガイは生き物、静かに大切に」、二番が特に面白いと思うのですが、「アコヤガイの身になって行動する」と書いてあるのです。

真珠づくりのいろいろな工程の話も非常に面白いのですが、今日はその説明をする時間がありません。興味ある方は、また宣伝になってしまいますが、『もの人類学』の論集の私の論文をご参照いただきたいのですけれども、挿核手術と呼ばれる外科手術をすることで宝石としての真珠を作ります。その外科手術のときに先輩の技術者が後輩の技術者に対して指導するときの言葉が面白くて、後輩の技術者が効率よく手術をしようと思つて雑に扱つたりすると、「おまえな、貝だつて痛いんだから大切に扱え」「貝の身になれ」みたいな言葉を言うのです。面白いのは、単なる精神論ではなくて、こういうことを言う養殖場と言わない養殖場が幾つかあるのですが、明らかにこういうことを言っている養殖場の真珠の出来の方が非常にいいのです。一つは斃死率といって、貝の死ぬ率自体が少なくなるし、できたものの品質もすごく良くなるという、ある種の相関関係があるわけです。

今日の情動、感情とのテーマで言うと、すなわちデカルト的には、心なき客体というよりは、「貝だつて感覚を持つて痛いのだ。貝の身になってやれ」というような一種の共感(empathy)、もしくは感情移入の対象として真珠貝が技術者の前に立ち現われていると言つてもいいようなモメントが、私が調査に通つていくうちに何度も出てきました。これは、そうではない養殖場もあるから、全部とは言えないのですけれども、少なくとも幾つかあるということが分かってきました。

#7

今度は真珠貝の死んだ後です。幾ら共感の対象とはいっても、産業として真珠を作るとき

には、ある種、残酷な運命といえますか、真珠貝を最終的には殺す、死なせることによってしか真珠は得られないのです。ですから、大手の先ほど言ったような真珠貝養殖業者だと、年間に何十万という単位の貝を殺さざるを得ないわけです。そこは非常にドライにもちろん殺さざるを得ないのですけれども、殺して、それでおしまいになるかという、そうではありませぬ。

では、何かというと、真珠貝供養を、日本の特に真珠養殖業者の間では全国でほとんど組合レベルでやっています。それで、真珠貝供養塔を建てるのです。左側の写真が愛媛県の真珠養殖組合が建てた真珠貝供養塔です。右側の写真が長崎の真珠組合の供養塔です。これを日本の養殖組合がある各地でやっています。

# 8

三重県の賢島という、有名な御木本幸吉が真珠養殖を一九世紀後半に始めたところがありますが、これはその三重県の養殖組合の真珠貝供養塔です。

# 9

これは先ほどと少し違って、特に供養祭の様子なのです。養殖業者の方は一年に一回供養祭という供養のためのお祭をするのですね。そのときは、その供養塔にはお餅や果物、日本酒、花束、みかんなどのお供え物を供えます。

# 10

さらに食べ物以外のお供えをしているのです。大月真珠、田崎真珠株式会社など、真珠の養殖業者ごとに、白いものが詰まった袋が見えますが、これは何かというと、真珠の球です。

水揚げされ、収穫された真珠の球の一部を、感謝の印を示すために海にお返しするというシンボリックな行為としてやっているわけです。

#11

次に同じ三重県の真珠組合のものですけれども、近くの寺からお坊さん呼んで、人間の葬式と同じように供養を行うということです。アコヤガイへの謝辞を述べる全真連会長です。全真連とは何かというと、全日本真珠養殖組合連合会という業界団体で、そのトップの人が、「アコヤガイの皆さん、ありがとう。皆さんのおかげで真珠ができました」というような式次第をするということです。

#12

これはお焼香をしています。海女が焼香をしているのですが、なぜ海女かというと、真珠養殖は歴史的に海女が潜って貝を取ってきたからです。ただ、今ではほとんど海女は関係していません。ちょっとネタをばらしてしまうと、実はこれは限りなくやらせに近い写真で、これは海女さんの格好をしていますけれども、本物ではないのです。今では海女との関係はほとんどなくなっているのですが、一応シンボリックにいてほしいということで、三重県に養殖業者の人がよく通っているバーがあり、私も連れて行っていただいて、何回かお世話になったことがあるのですけれども、そのバーのママさんとホステスさんです。ポイントは、ちゃんとお焼香をするということです。

#13

最後に、これは何をやっているかというと、先ほどお供えした真珠をばあっと海にまいて

感謝の証にするということですが。

こういうことは、実は日本では真珠業者だけではなくて、ご存じの方もいると思いますが、いろいろな業者の方がやっているのです。私は今、もの供養塔オタクみたいになって、各地を行脚して供養塔の写真を撮ってきているのですが、これは何だか分かりますか。これは養殖業者のフグ供養塔です。右側は答えが書いてありますね。卵塚です。これは人類学者で有名な『築地』という本を書いたテオドル・ベスターさんの本にも出てきますけれども、寿司の業界団体が作った卵を供養するものです。他にもエビの供養など、いろいろあります。下の左側は、答えが書いてありますが、眼鏡業者の眼鏡供養塔です。

では、クイズです。右側は何か分かりますか。何の供養でしょう。時間がないので答えを言ってしまうと、これは日時計で、カレンダー、こよみの業者がこよみ供養をするのです。

# 14

こういう営利企業、業界だけではなくて、最近面白いと思ったのは、「もの」研究のメンバーの霊長類学者の京大ご出身の黒田さんに情報提供していただいて、ついこの間、私が京大に出張に行ったときについでに写真を撮ってきました。現代的なテクノサイエンスの中のもの供養としての事例かと思うのですが、実は京大の医学部で実験動物に対する供養をしているのです。先ほど西井さんの話に、北大の生理学の南先生という方呼んでやったということが出てきましたが、彼も京大出身ですね。大脳生理学ではマウスを何十匹、何百匹と殺していくということです。その中では徹底的な、それこそ動物機械論のパラダイムでももちろん感情も研究するのですが、一方で、きちんとというか、こういう供養も現在に至るまでやっている。関係者の方に話を聞いてきたのですが、毎年一回、供養祭も医学部の教授や学

部長などを含めてやっているということをおっしゃっていました。

#15

そろそろまとめに入っていきます。「もの」研究、非人間の存在者研究からの情動・感情への接近ということですが、真珠貝は私の事例ですが、それ以外にも、先ほど言った「もの」研のプロジェクト、それから、もの班、非人間班で呼びびしようと思っている方の研究です。

例えば、今スライドで見えていただいている上の写真はバリ島の仮面なのですが、バリ島の仮面に関して非常に面白い研究を吉田ゆか子さんという若手の人類学者の方がされています。仮面と人間とのある種、濃密な関係についての民族誌的な研究です。

それから、先ほどお話をしていた久保さんは、写真の下側のソニーのエンタテイメントロボット AIBO に関する研究です。例えばロボットを、先ほどの真珠貝の「かわいい」ではないですが、同じように「かわいい」と感じて遊ぶオーナーの話です。

あるいは資料七に挙げたのは、佐川さんという方は東アフリカの牧畜民、遊牧民のダサネットチに関して非常に面白い紛争に関する研究をされていますけれども、彼はダサネットチで銃、鉄砲、ライフルと人間とのある種、非常に濃密な感情的な結びつきを含めた関係を記述されています。

#16

現代の例でいいますと、先ほどの久保さんがご専門で今ご研究されていますけれども、コンピュータと人との間にも、場合によっては濃密な感情的な相互作用を伴い得るということ、古典的な例では、資料の八に挙げた「イライザ」という、単なるプログラムなのに、



それと会話しているとあたかも本当の人間のように感じて感情移入してしまう。あるいは、ハリウッド映画で最近公開された「Her / 世界でひとつの彼女」という映画があります。僕はこれを見て非常に面白い映画だと思ったのですが、詳しい話はできませんが、ここでもコンピュータと人との感情的な相互作用の話をしています。

まとめていいますと、よくアクターネットワークの話では、「もの」に関するエージェンシーが人間だけではないということはよく強調されるのです。それはもちろんなのですが、さらに広い意味での心、(心)で言う情動 (affection)、感情 (emotion)、それから、感覚 (sense) といったものは、人間や人間同士の関係だけに限定されるテーマではありません。人類学を含めて、ともすると、われわれは情動や感情ということを考えるときには人間同士の関係性の中で考えるのですが、それだけではないだろうということなのです。非人間と人間との情動的な側面により注目する必要があるのではないか。

## # 17

これで本当に終わりにします。まとめですが、統御モデルから共感モデルへということ。繰り返しになりますけれども、現実の場面においては非人間の「もの」は、単なる心なき客体、心なきオブジェクトという側面ももちろんあるのですが、それだけではないか。言い換えれば、人間が一方的にテクノロジーによって支配し、コントロールする対象としての「もの」の側面だけではなくて、「もの」に対して、今回の真珠でも、ロボットの AIBO でも、何でもいいのですけれども、語りかけたり、場合によってはお願いしたり、交渉したり、感謝したり、共感したり、恐れたり、供養する対象として「もの」が立ち現われてくるようなモメントもやはりあるわけではないかということなのです。

最後にやや抽象的にまとめようとすると、統御モデルから、それだけではなくて、言っ

みれば対話交渉共感モデルということも同時に考える必要があるのではないか。その意味で、「もの」研究と情動・感情研究は、一見すると正反対のように見えるのだけれども、実は接点を持ち得るのではないかとということを考えています。

だいたい時間をオーバーしてしまいましたけれども、以上で私からのお話は終わりです。どうもご清聴ありがとうございました。

(西井) ありがとうございます。では、時間も押しているので、早速、次の内藤さん、よろしく願います。

#### 4 場所性―移動と空間

内藤 直樹 (徳島大学)

途中で一部スライドを使わせていただくと思います。先ほど代読の事例があったと思いますが、私も実は広島大学の岩谷さんという方の代読です。ロマの研究をされている岩谷さんが「場所性―移動と空間」班の班長をして、私は今日はそれが憑依したという形で読ませていただくのですが、読むだけでは芸がないので、少し補足しながらお話しさせていただきますと思います。

「場所性―移動と空間」というタイトルですが、恐らく私の理解では、最初の趣旨説明のときに、同じ場にいるということベースを考えていこうというようなお話があったと思います。そもそもわれわれが同じ場所に居合わせるとはどういうことなのだろうかということ、を少し考えようということで、移動や空間現象について考えてみようということだと思えます。基本的には岩谷さんが作成されたレジュメに従って読んでいこうと思います。



要旨ですが、グローバリゼーションの進展によって人・もの・情報・イメージのフローが増大する中で、近代国家の前提にあった定住による生産と領土概念は再編を迫られ、場所は人間と非人間が織りなすネットワークの中で浮沈する動的なものとして受け止められつつある。こうした状況において、人々の国家の枠組みにとどまらないコミュニティや場所への関与、あるいは帰属意識への希求は強まりつつある。同時に、モダニティの延長でもある均質的な「グローバル公共空間」なるものが拡大する中で、従来の公共空間に境界線が引かれ、新たな排除と資源の再分配をめぐる競合やコンフリクトが生じている。

この「グローバル公共空間」は岩谷さんの作られた概念で、空間の私物化現象とともにグローバルに広がって、かつての公共的な空間の性質が変わりつつある空間のことです。例えばショッピングモールや、景観重視のために立ち入り制限されるようになった観光地、あるいはジェントリフィケーションといったものです。それから、少し違いますが、難民キャンプや第三世界の開発モデル地区、あるいは先住民保護区、それから、アフリカですと外資による大規模な土地の買占め現象が起こっている空間を「グローバル公共空間」と呼びましようとしています。この研究班では、この「移動論的転回」ともいえる社会状況において生じている新たな人と空間の結びつきと、そこで立ち上がる「社会的なもの」のあり方を、情動の観点から再検討することを目指すというものです。

せつかく全体で情動論的展開と言っているのに、移動論的展開をここに持ち出しているのですが、これは社会学者のジョン・アーンリが述べているところの、いわゆるグローバリゼーションのようなものですが、移動情報通信技術が高度化した現代における社会のあり方を把握するために不可欠な、彼が言うところの新しい移動パラダイムのことです。これを採用しましょうということですが、ここで言う場所というのは既に確立している静的なもの、ある場所、物理的空間というよりは、先ほどの床呂先生のお話ではないですが、人間、非人間から

成る主アクターが、特定の時間ないしは空間、時空間において何らかのパフォーマンスを行うために、たまたま寄り集まるネットワークの中に刹那に立ち上がるというものが、彼の言うところの新しい場所概念です。これは物理的な空間としての場所というよりも、もっとダイナミックな動きの場ともいうもので、その場所自体が旅をするものであると言えます。しかしながら、これまでの社会学者は場所を静的なものとして捉える傾向があつて、このように移動する社会、例えば階層移動、階級移動などは扱ってききましたが、移動そのものを社会学は十分扱ってこなかったのではないかというのが、アーリーが問題提起するところです。

こうした議論を踏まえて、この研究班では以下の五点について検討するとなつていきます。一つ目は、グローバル資本主義の拡張を踏まえた一九七〇年代以降の空間論の再検討です。もう一つは空間の陥入と拡張―公共空間、アサイラム空間、サイバースペースというもので、これは皆さんは何のことだと恐らく思われると思われるので、やや補足説明をさせていたただこうかと思ひます。

まず空間の陥入ですが、これは空間が拡張していく過程で、開放するというよりも逆に内側に捻じり込んで、時に内向化していく動きのことを指して作った岩谷さんの概念です。

アサイラム空間について少し説明しますが、これまで国家は、生産性のある国民としての能力や資格を創出した人々を一時的に有名なアサイラムに隔離して、そこで教育、訓練、治療などの対処を行うことで社会的に包摂しようとしてきました。このアサイラムは、ご存じのように、ゴフマンの定義にあるように、多数の類似の境遇にある個々人が、包括社会から遮断されて、日常生活を送る居住と仕事の場であり、そこでは監督者と被監督者の間に根本的な裂け目があるのだという場所です。

このアサイラム空間とは何かというと、アサイラムをベースにしているのですが、近年の統治の技法や情報テクノロジーの進展とともに、このアサイラムは単なる箱物ではなくて、脱領域化して、箱の外に出ていくような、監視社会みたいなものをイメージしていただければいいのですが、偏在する状況のことを指しています。そうすると、そこでは私たちは全てが理論的には被収容者であり得て、もはや退所する場所などないのかもしれないという私が以前に少し考えていた研究会の出発点になっていたアイデアです。

しかしながらゴフマンは、そもそもですが、全制的施設における秩序が、職員と被収容者がフォーマルな施設の規則制度に服従する第一次調整だけではなくて、それらを逸脱した職員や被収容者のさまざまなインフォーマルな実践によって作られている点も指摘していました。しかもそうしたインフォーマルな実践の一部は、最後に公式に承認されることもあると述べています。つまり、そもそもアサイラムは施設や制度のみによって完結するのではなくて、それを構成するさまざまなアクターによるさまざまな実践を通じて初めて達成されるという、ある種の残余を持ち合わせていると考えていました。

もう一つ、そもそもアサイラムはドイツ語に訳すると *Asyl* なわけですが、古くからヘンスラーや網野によるアジール論においては、このアジール空間は無援、統治されない人々による自由な空間、アサイラムとは真逆のイメージを持つ空間として描かれてきました。ですから、なぜアサイラム空間とわざわざ言うかという点、どちらも弱者が庇護を求めて入ってくるような空間ですが、その庇護の空間が持つ、統治の方に振れているものと無援の方に振れているものという二面性がどのように作られるかということ、身体性あるいは情動との関わりに注目して考えてみたいと考えています。これが二です。

以下、三、四、五ですが、これはレジュメを読みます。三) 空間を形成する身体と情動、四) がさまざまな移動を可能にするメディアとテクノロジー、五) が場所をつなぐネット

ワークです。

一九七〇年代以降の空間論で指摘されてきたのは、境界が確定可能な物理的な空間ではなくて、社会的生産諸関係の産物であり、意識や行為によって生成する空間、あるいは異なる社会関係を媒介とする異種混濁的な空間でした。そこで空間を形成する主体はポストモダンの、あるいはノマド的な存在です。しかしながら、グローバル資本主義の拡張と浸透がもたらしているのは社会関係の切断と区画化であって、ノマディズムを称揚するのみでは看過されているのがあまりにも多いのではないか。例えば、閉域内を一体化するとともに異質なものを排除する「公共的情動」と、そこから排除された者の居場所や帰属への希求との対立は深まっていて、しばしばこれが暴力的に表面化します。その表出は地域によって異なる様相を呈していて、近代国家の枠組みや制度の問題を引きずる一方で、領土を超えて暴力が連鎖していきます。

ここで生じている暴力の背景を明らかにするためには、空間を規定する制度的な条件、例えば国家の領域、あるいは難民やホームレス、障害者など、既に分類されたエイジェントの種類といった条件を俯瞰的に捉えるのみではなくて、暴力の連鎖を加速させているメディアや、それによって喚起される情動について検討する必要があるだろうというものです。

これについてはレジュメにもスライドにもないですが、岩谷さんから頂いた事例を少しご紹介します。

インターネットや種々のメディアの事例ですが、これらは場所に対するイメージをかき立てています。欧米を中心に、ジプシーをファッションとして消費するような動きがあるということです。この動きは古くからあって、一九世紀フランスのボヘミアンから始まって、現在ではジプセットスタイルという生活スタイルがクリエイティブクラスを中心に再流行しているということです。

このジブセットスタイルという言葉は、二〇〇九年にニューヨークのジャーナリストによって提唱された生活スタイルで、ジブシーと飛行機にたくさん乗るジェットセットを掛け合わせた造語だそうです。目指されているのは、「野性的で型にはまらないジブシーのエリート」と、ジェット族の洗練とスピードを混ぜ合わせた生活へのアプローチ、それから、「上流と下流のライフスタイルを横断したもの」で、その条件は、「クリエイティブな仕事を持って、どこにも属さないで、移動し続けている」という素晴らしい暮らしです。

これに関して、経済学者のリチャード・フロリダのクリエイティブクラス論では、例えばこういう人が、科学、エンジニアリング、建築、デザイン、教育、芸術、音楽、娯楽など、何らかを作り上げることによって報酬を得る人々が被雇用者に占める割合が増加しているということです。そのような人々が住みやすいと感じる都市環境を整えることこそが、近未来の都市の発展を左右するといった議論をしています。こういう人もいるということです。このクリエイターたちにナイスな環境指数のことを「ボヘミアン指数」と呼んだりするらしいです。

このような動きや理論が対象としているのは、自由に国境を越えて、場所にとらわれずに仕事をする資本を持った人たち、あるいは新興国で出現しつつある新中間層と呼ばれるような人たちです。彼らはますます場所にとらわれることなく、自由に異なる地域をまたぎ、移動を繰り返し返す人々です。そのような彼らの世界と、かつての場所との関わりを失い、移動できなくなってしまう人々もいるわけで、彼との間の距離はますます開きつつあるということです。このニューボヘミアンは能動的な存在であることはもちろんですが、非常に感性豊かな存在でもあると定義づけられていると思います。

それに対して、かつての場所との関わりを失ったロマ、あるいはジブシーといった人々は、フランスやインドやギリシャなど、さまざまな場所の公共空間から締め出されているというようなことが起こっているということでした。

また、これまで空間からの排除と包摂の問題は、土地の権利や経済問題に還元されがちであり、居場所や帰属を求める人々の権利回復運動に焦点が当てられがちでした。しかし、空間がコンフリクトや愛着の対象となる背景として見逃せないのが、環境から働きかけを受ける身体の受動性の側面、あるいは情動というか、感覚、センスに近いものかもしれませんが、匂いや音によって喚起される情動の問題です。

#1

少しこれに関連して、合っているかどうか分かりませんが、事例をご紹介しますと、バウマンが後期近代は人間廃棄物を垂れ流しながら拡大を続けていくと言っているわけですが、この廃棄物処理場の典型例としているのが、ケニアのダダーブ難民キャンプです。このキャンプはケニアの東側にある非常に大きな難民キャンプですが、整然と区画整理されていて、九一年以来、数十万人のソマリア難民が生活しています。三つのキャンプに分かれていて、このときの人口が二八万人でした。

#2

キャンプは非常に区画整理されています。私はずっとこれまでケニアを調査してきたので、物質的にはケニアの水準からして非常に充足度の高い生活をしていると思うのですが、その一方で、彼らはケニア難民法によって、移動、労働、それから、政治的参加の自由が高度に制限されているということです。

これはケニア難民法の一部です。難民はどこに住んだらいいかという、例外がいろいろありますが、難民キャンプに住みなさいと書いてあります。彼らには移動の自由もないわけです。



このキャンプでは、いつ果てるかしのれない一時的で依存を強いられる暮らしが続けられているのですが、そこでは依存的な生活に対するやり場のない怒りみたいなものからか、しばしばNGO職員に対する暴動のようなものが調査中にも発生したりします。しかし、そういうことよりも私の印象に残るのは、彼らが非常に静かなある種の諦観というか、無気力的な感じの状態で日々暮らしているようなところでした。

例えば、私がお世話になっているホストファミリーのお父さんはNGOで雇用されていて非常に経済的には恵まれています。私が彼に「なぜここで働いているのですか。こういう恵まれたところで働いていいですね」みたいなことを言うと、「こんなものは、ただ私がこの場所で、この状況で頭がおかしくならないためにやっているルーチンワークに過ぎないのですよ」というようなことを説明するわけです。怒りとか、悲しみとか、そういう割と分かりやすい情動もあるのですが、こういうキャンプみたいところで感じる情動的なものは非常に無力感のようなものでした。

#3

難民キャンプでは人口がほとんど把握されていて、それに応じて生存に必要な食料が配給されます。労働してはいけないから、食料は配給されるわけです。ですから、その意味では、これはセンスの話ですが、難民の味覚は統治されている。何を食べるかということはもう決まっているわけですから、管理されているわけです。

#4

では、何を実際に食っているかということ。難民の日常生活を見てみると、配給食とは全然違うものを食べているのです。これはこのときに食べたものを書いただけですが、

赤で示しているのが配給食では作れない食べ物なのです。ミルクティはお茶葉と砂糖とミルクが要りますから、配給食では絶対に作れないわけです。全然違うものを食べているのですね。ソマリ族というのは牧畜民で、牧畜民ソマリは日常的な食品としてミルクティ、それから、イタリア占領時代に根付いたパスタなどを食べています。

それを手に入れるために、キャンプには難民キャンプというイメージとは非常にかけ離れた感じのいいお店がたくさん並んでいる巨大闇市があつて、僕もすごく便利でいつも買い物しているのですが、キャンプにはこれがあるということです。それから、ここに商品を入れないといけないですから、これをゲットする流通ルートが作られているわけです。このルートは、細かい説明はしませんが、彼らが難民としてここに来た後、約二〇年かけて少しずつ作り上げた信頼関係によつて成り立っています。この闇市は当然ホスト国ケニアの法律上は違法ですが、全ての関係者が黙認しています。実はこれによつてキャンプにおける日常生活の秩序が形成されているわけです。

これは余談になりますが、今日は時間の都合で端折ります。難民は近年のアフリカで爆発的に普及しつつ聴覚メディア、視覚よりも受動的な感覚の聴覚を用いたメディアである携帯電話を用いて、こうした自らの場所を形成しないしは拡張しようとしていました。これが一つの感覚に関する例です。事例を終わります。

レジュメの最後の部分を読みます。このように空間は無味乾燥で相互置換可能なものではなく、記憶や感覚に直接訴える身体の延長として捉えられるがゆえに、空間からの差別や排除が大きな問題となる。さらにグローバルな資本と人、情報の移動は、異なる空間の相互乗り入れを可能にしている。それらは現代の種々のメディアやテクノロジーによつて加速し、新たな空間イメージを形成しながら空間そのものを構成している。本研究では、こうして出

現した現代的な空間を結ぶ異なるネットワークのあり方にも着目したい。メディアや新たな社会運動、それから、今日は触れませんでした。観光など、異なる形態のネットワークに見られる偏向や不均質性、刹那性から空間の問題を逆照射することも可能であると考える。以上です。ありがとうございます。

(西井) ありがとうございます。岩谷さんが憑依しただけではなくて、内藤さんも融合して発表していただきました。どうもありがとうございます。

それでは続けて、最後の発表者、真島さん、よろしく願います。

## 5 災害・政治・生

真島 一郎 (AA研)

真島と申します。「災害・政治・生」というテーマに、当初は「経済」ということばも加わる予定だったのですが、それは除きました。

アレントの『人間の条件』を、話のふりだしとします。「人間の条件」というこの作品のタイトルは、あらためて顧みると、まるで人類学という学問の根本的な問いを凝縮させた表現のようにも見えてきます。ただ、人類学はこれまで、アレントのこの作品に、文字どおり「人間の条件」として正面から向きあってきたのかという問題意識をもっています。

みなさんご存知の古典ですから、いまさら概要を話すのも気がひけます。そのうえいつそ気がひけるのは、たとえば「親密圏」の議論なり、「生政治」、「生権力」あるいは「ホモ・サケル」の議論なりに華やかな展開をとげていく以前の、アレントの思考における大前提、つまり人間の活動的生をめぐる三様態の関わりそのものを、いまは再考したく考えているか



らです。人類学が、『人間の条件』をまさに人間の条件として真正直に捉えていくためには、あの「労働／仕事／活動」の三区分にまで、もういちど立ち返ってみる必要があるのではないかとのことです。

アレントの枠組にしたがえば、このうち人間の生の根底をつかさどる「労働」は、古典古代以来、親密圏ないしはオイコスのうちに閉じこめられてきた。しかし、生産性の急激な増大をみた近代にいたって、人間の生そのものを扱う「労働」が、以後は人間の活動的生の中心であるかのように増幅をとげた。維持されるべき「生」と、そのための「労働」が「人間の条件」の中核に食い込んできた結果、これに連動して「社会的なもの」が、一方では従来の公共的生ないしは「政治的なもの」を、また他方ではオイコノミアとしての「経済的なもの」を、同時に両面から浸食し、「生」と「労働」の席捲する時代がおとずれた。人間の生命過程の増殖プロセスそのものが活動的生の中核におさまるために、経済的なものの領界では、生産と消費の無限循環が発生する。さらに、公共圏における言論の力が掻き消される結果、さらにいえば、社会分業がもともと個体間の差異には頓着しない、種としての同姓性を前提としていたのとおなじしかたで言論が等質化していく、つまりは全体主義の社会が顕現するというのが、アレントの物語だったように思います。

こうした、いわば「反社会的なもの」の発想は、おそらくアレントに固有なものではなく、一定の系譜をたどることができるように思います。社会で生ずる力に嫌悪をいだくニヒリズムであれば、もちろんル・ボンからエリック・ホッフアーにいたるまでいろいろな書き手がいたわけですが、そうしたグループを別にすれば、二〇世紀における「反社会的なもの」の系譜学のうちで、今もなお傾聴に値するだけの強度をおびた発言者のうちに、このアレントとシモーヌ・ヴェイユのふたりをあげることは可能だと考えています。

二〇世紀における社会的なものは、それ自体としては無垢な生の力を支えに、政治的なも

のも経済的なものも併呑しながらけつして暴走と増幅を止めることがない、したがってそれは悪であるという論理の持つて行き方が、一方では知られてきた。そして他方では、こうした生の発展を調整していくための統治テクノロジーという枠で、生政治や生権力の議論も展開を上げてきたわけです。ただ、こうした議論には、やはり何か欠けてはいないか。その欠けたものの存在は、もちろん一連の議論のただなかで前提とされ、問題視されてきたからこそ、私もこのように問うことができるわけですが、そこにはやはり、当面の思考対象として何か欠けてはいなかったかと、いささか単純すぎるしかたで、そう問うてみたくありません。そして、これまで欠けてきた当のものこそ、人類学者がいま思考すべき、そして現にじゅうぶん思考可能な、その意味では人類学的思考における種別的な「人間の条件」であり、「生」の状態であるようにも考えてみたくありません。そうした思考が可能になるのは、「人類学者」というより、正しくは、個別のフィールドにむきあう二〇一四年の「民族誌家」、エスノグラファーだと思います。絞りんこでいえば、そうした思考が可能であり、また必要にもなるのは、二〇一一年以後のこの国の状況を念頭におきながら個別のフィールドへと足をはこぶ、この国のエスノグラファーではないかとさえ思います。思考には、同時代の裏付けがつけねにともなうものです。ちょうどアレントとヴェイユが社会的なものの「力」の彼岸に目撃した悪とは、まぎれもなくドイツ第三帝国の「力」であり、あるいは市場「社会」、消費「社会」の「力」であったように、とくに三・一一以後の民族誌家は、ネオ・リベラルな統治テクノロジー、生産⇨消費⇨再生産⇨廃棄のエコノミーを通じて「生かされ」ている人間の生、いわばもうひとつの生、もうひとつの社会的なものを目撃しているはずではないのかということです。

ただし、「もうひとつの〜」をこのように繰り返すからといって、私は、伝統への回帰はもろろのこと、ロマン主義への回帰を語っているわけでもありません。ロマン主義的な想

像力をするべく働かせて、民族誌家がフィールドのただなかで何らかの対抗的な他者像を發明するように促しているのではないからです。

社会的なものをめぐる考察は、じつさい、それほど純粋な具合にはいきません。人類学が近代の到来をまつて生まれた思考実践であるかぎり、民族誌家は、社会的なものを、かねて一種の不純さのなかで目撃してきたわけですし、その不純さがいま、かつてなく深刻なかたちで思考可能となり、また思考する必要が生じてもいるのではないかということです。社会という場でいろいろな姿をとつてあらわれる社会的なもの「力」というのは、善悪の基準を明確に区分した思考の純粋さでは太刀打ちが効かないちように、三・一というように、三・一というあの災害Ⅱ事故をつうじてますます明らかとなったのは、純粋な人為でもなければ純粋な自然でもない事態、いわば第一の自然と、社会という第二の自然とが、人間の生命過程を媒介として広い意味でのエコロジカルな破局過程を加速させながら折り重なつていく、まさにそうした統治と生産Ⅱ消費の帰結だったような思いがするからです。

たしかに一見したところ、三・一という事件は、生命過程の際限のない暴走がこの星にいかなる破局をもたらしてしまうのかというアレントの警告、ヴェイユの予言を地で行くような内容をもっていたようにもみえます。ただ、さきほどの床呂さんのご発表と関わる点かもしれませんが、むしろ人類学、あるいは民族誌学は、モノと人、自然と社会の境界線がもうひとつのしかたで混在しているような状況を生きる人びと、しかも、思想史の言説が行き交う場所の外部、見えない壁の向こう側で、それとは無縁に生きてきた人びとにとつての「人間の条件」なり、「活動的生」なりをひたすら見つめてきた点が、重要だと私は考えています。

「壁」という表現をここであえて使ったのは、たとえば人類学では重要な概念のひとつにあたる「贈与」が、グローバル経済の促進をつかさどる話者によってどのように使われて

きたかを徴候的に思い出しているからです。「ドナー国」のように用いられる場合の「ドナー donor」ということは、すでにほぼ日本語化したカタカナとなっています。そればかりか、アフリカ諸国に対してなされるドナー側の「無償資金援助」という公式表現も、日本語では漢字が六つもなりますが、これをフランス語に翻訳すれば「don」の一語で事足ります。いうまでもなくそれは、モース『贈与論』のタイトルに掲げられた「贈与 don」そのものです。この場合の「贈与」とは、法の脈絡でいう「片務契約」、すなわち *contract unilateral / unilateral contract* を明示するための概念ですが、たとえばこうした言葉の変換をつうじて図らずも露わとなるような交通の途絶、ユニラテラルな、あくまで「片」務でしかない身ぶりをつうじて一瞬ほの見えるような壁がもし想像できるとすれば、それこそ、かつての人類学で意識化されたような異文化翻訳の壁とはまったくちがう、かといって「貧困」ということで簡単に仕切られるような壁でもない、人類学にとっての新たな課題としての壁、であるような気がしています。

その壁の向こう側で、純粹さを欠いたかたちで動くような「社会的なものの力」を考えはじめると、これまで「力」という言葉そのものが、人類学ではべつの意味で重要な論点をおびていたことを思い出す作業も大切だと思えます。贈与をふくめた最も広い意味での社会的交通との関わりで、かならず顔をのぞかせてきた「マナ」に代表される不分明な民俗概念を、一種の特権的なシニフィアンのように解釈しはじめたときから、人類学は社会的なものの力を考えていく手立を失ってきたとはいえないでしょうか。人類学的思考にとって「力」とはいったい何だったのかを考えるうえで、その点、「ちから」という日本語には、一種の翻訳的効果がそなわっているように思えます。社会的なものとの関連で重要になる概念のうちには、たとえば「社会的凝集力 social cohesion」や「想像力 imagination」といったものがあります。cohesion にしろ、imagination にしろ、それは本来「凝集」や「想像」と

訳すだけでも事足りるはずなのに、とくに社会的なものが関係してくる場面では、わざわざこれに「力」を添えて、「凝集力」「想像力」のように訳さなければ収まりの悪くなる文脈が発生する。おそらくそれは、たんにシニフィアンの過剰性を裏書きしているだけの記号論的操作の派生系というだけでは言いきれいていない何か、つまりは、新たな人類学にとつての『人間の条件』、人間の活動的生における社会的なものの位置づけが、この「力」ということばをつうじて賭けられているからではないでしょうか。

「災害・政治・生」というテーマをめぐって自分なりに考えていることは、だいたい以上のような感じですが、西井さんが今回企画された共同研究の主要テーマである「情動」と、それがどのようにつながってくる可能性があるかという点にふれて、話を閉じたいと思います。人間の条件としての「生」は、種としての生命過程からみれば、先ほどのアレントのような無限性をひとまず措定することができますが、そのような意味での「無限性」が語れるのも、ひとえに個体としての人間の生が有限であること、つまり個別の生の有限性を、基本的なコントラストの関係で繋げているからである点はいうまでもありません。人は死すべき存在であるというその有限性が、きわめて強い情動に襲われるかたちで、いわば極限的なかたちで当の人間に告げられる事態を、ふたつ例示することにいたします。

ひとつは、集合的な次元における生の極限型、すなわち戦争です。ただし、ここでいう戦争とは、むしろ狭い意味での戦争にかぎりません。エスノグラファーがフィールドでたまたま直面するかもしれない狭い意味での戦争勃発が、もうそれだけで極限的な空間をひらいてしまうことは殊更いうまでもないからです。そうではなく、たとえばアフリカ研究者であれば、メディアが可視化する「戦争」だけが戦争ではない事実を、なんども実感してきたはずだからです。私が目撃したのは、たかだか構造調整期以後の西アフリカにすぎませんが、小さな戦争とも呼びたくなるような、当事者の生にとって耐えがたい出来事ならば、都会で



村で、そうした小さな戦争を私はたえず目の当たりにして、戦争をつうじて人びとを襲う情動にわずかばかりでも感応してきたような気がします。たとえ奴隷交易の数世紀を措いたとしても、その意味での「アフリカの戦争」は、おそくとも一八八五年から日常の泥沼と化して、今日にいたるまでたえず、終わりなく継続してきたとさえ言ってよいのかもしれない。メディアが、あるいは個別の国家主権が「戦争」として可視化する戦争だけではないそうした日常の小さな戦争、集合的生の極限型をまえにして、はたして民族誌家は、『人間の条件』としてのその意味を、生の有限性そのものをどこまで翻訳できるのか、というのが第一点です。

もうひとつは、有限性それ自体を体現した個のレベルでの生の極限型、たとえば孤独です。ヒトとヒトとの紐帯にひとときわ目を向けるのが、本来の「人類」学的思考であり「社会」学的思考であったのだとすれば、そうした視線の向け方からは唯でさえ零れ落ちてしまうような、他人と繋がるための手立てがどうしてもみつからない、ポリテイカリー・コレクトな希望の文体で表象することなどけつしてできないような、たとえばアフリカの大都市近郊の生に生ずるような孤独、狭義の孤独を、まずは念頭に置いたうえで例示です。とはいえ、戦争とおなじく孤独にも、狭義の孤独、たとえばスラムの孤独にかぎらない、無数の小さな孤独の広がり、フィールドには待ち受けているはず。というのも、個としての人間の有限性とは、そうした小さな―しかし、まちがいなく根源的な次元での―孤独のことを指しているはずだからです。私はこのように言いながら、共同体論としてはきわめて破格なジャン・リュック・ナンシーのあの作品、『無為の共同体』のことを思い浮かべています。自分にとってどれだけかけがえのない親密な他者であれ、その彼／彼女が自分自身でないかぎりには、その死をぜつたいに共有できないというごく単純な、しかし厳然たる事実を再認することの反復によってしか、ある種の共同性は成り立ちえないとすれば、いわゆる「公共圏」か

ら排除された人びとだけでなく、有限者としての個人の生にはかならず、日常の小さな孤独がともなっていて、個別の情動とともにその小さな孤独が日常的に更新されているのではない。ならば民族誌家は、その生と孤独とを、はたしてどれだけ翻訳できるのかということが試されているのではないだろうか。

じつさい、小さな戦争、小さな孤独は、これまでいったいどのように処理されてきたのでしょうか。市場にとつての外部に位置づけられる事象が「市場外要素」と呼ばれてきたように、たとえば政治学でも、公共圏における言論の交流にとつてあまり有益な効果をもたらさないだろう人間の情動は、いわば政治外要素として位置づけられてきたのではないのでしょうか。「外要素」としてではない情動の姿を、人類学のようにヤクザな生き方ならばかろうじて望みできるのではないかと、いまはただ、ぎりぎりのところで臆測するしかありません。すみません、以上です。

(西井) どうもありがとうございました。いろいろ話が多岐にわたって、皆さまの頭も混乱しているかもしれないのですが、このまま続けると、コメントターの先生方もちよつとお疲れだと思しますので、五分ぐらい休憩を入れて、その後はコメントターの方にお話しただいた後に続けてディスカッションということにしたいと思いますので、よろしくお願ひします。

### Ⅲ コメント

(西井) 最後のセッションといいますか、今からお二人のコメントの方の一五〇二〇分ぐらい、それぞれコメントを頂いた後で、休憩を取らずに、そのまま一時間ほどディスカッションということにしたいと思います。それでは、お疲れのところ、あと少しよろしく願います。田崎先生に関して、真島さんから紹介いただいてもいいですか。

(田崎) といっても、別に面識があったわけではないのです。

(真島) そうなのですね。何々学という説明の仕方では説明できない田崎英明さんだということ、もう皆さんもご存じでしょうけれども、特に田崎さんの説明で「田崎さんという方はこういう方です」ということが言えないぐらい、どんな話題でも書ける人です。先ほど私はアレントのことを話しましたが、田崎英明の前でアレントを語るというのは土台無謀な話で、その辺も少し緊張しているのです。

(西井) では、コメントを続けて頂くので、高木光太郎さんに関しては私が簡単に。

高木さんは、認知心理学者でよろしいのでしょうか、人類学の研究会のときに高木さんにはずっと加わっていたいただいて、とてもお世話になっています。高木さんのお仕事は、高木さんはそれこそ何にでもコメントできる方ということなのですが、例えば証言の問題などを裁判の記録などを使ってやっていらっしゃったり、それから、「シヨア」という、アウシュヴィッツの体験者を撮ったものすごく長い映画があるのですが、あれを使ってとても刺激的な論文を書いたりされています。ということです。すみません、簡単なご紹介です。

では、まず一人目のコメントーターの田崎さんからよろしく願います。

## 田崎 英明（立教大学）

ご紹介いただきました田崎と申します。今は立教大学の現代心理学部で、現代心理学というだけだと何となく想像がつくかもしれませんが。そして、その想像のされ方がちょっと困ってしまうのですけれども、その中の映像身体学科なのですが、学生も、教員も、人に話すと「何ですか、それ」と言われます。さらに私の肩書を英語に直すときに、高祖岩三郎さん（サブさん）、柄谷行人などを訳した人ですけれども、映像身体学科はどう訳すのだと言ってはたと頭を抱えたという、謎のところですよ。同僚は、最初の頃は映画監督や勅使河原三郎、宇野邦一さん、前田英樹さんなど、ドゥルーズアンがいたりしたところなのです。

そこが、例によってせちがらい世の中で、資金を取ってこなければいけないという話で、文科省から拠点形成、基盤形成何とかという、正確な名称は忘れてちゃんと見えないので、大ざっぱに言うと、イメージの生態学、イメージのエコロジーというような企画でやっていることがあります。心理学と映像身体学科から成る学部なのですが、心理学の先生は基本的に心理学の先生なので、3D映像がどれぐらい人を疲労させるかというような実験をやっています。映像心理学の方を担当しているもの一つは、例えばラッツァラートという画家の影響を受けた人を呼んで、その人に話をしてもらうときに、ヴィヴェイロス・デ・カストロなどを暗唱しながら、アニメズムの再評価ということを言っていたりしました。それから、去年の暮れぐらいに、『千のプラトー』を日本語に訳した宇野さんと英語に訳したブライアン・マスマとイタリア語に訳したバセローネという人とポルトガル語に訳したブラジルのペルバルという人を集めて、宇野さんが「これで四千のプラトーだ」と言っていたのですが、そういう国際シンポがありました。そのときもローラ・マークスという、ドゥルーズを使って映画を論じる人がいて、彼女が最近イスラムのデザインのことを論じた



りしながら、シンポジウムをしました。

そういった流れの中で、当然 affect という話もいろいろと重要になってきているのですが、今日は本当にすごく濃密なシンポで、一参加者としては大変面白かったのですが、これにコメントをするとすると、はたと頭を抱えてしまうのです。話したいことはいろいろあるのですけれども、まとめるのがなかなか難しいです。

一つは、私は授業の一つで現代思想解説というのをやっているのですが、ここでまず最初に、九〇年代以降、現代思想の世界ではやったことはパウロと動物だという話をして、さらに友愛というのもあるのですが、友愛というのはデリダの『友愛の政治学』があるだけではなくて、ドゥルーズ・ガタリの『哲学とは何か』の哲学者は概念を友とするものであり、実は友愛は九〇年代以降、問題になっています。近年ですとクイア・スタディーズやベルサーニなどの影響を受けた人たちが、もう一回あらためて性的関係を排除しない形でのフレンドシップというものとしていろいろな関係を見直したてています。

それから、動物というのは、もちろんデリダもあるし、ドゥルーズ・ガタリもあるし、興味深いのは、サイボーグ宣言のダナ・ハラウェイがその後は『The Companion Species Manifesto』という本を出して、やはり動物の話をしていることです。動物、さらにノンヒューマン、あるいはポストヒューマンという一つの流れが出てきていて、必ずしも affect の話とポストヒューマンの話が一つというわけではないのですけれども、ポストヒューマンをめぐる議論がしばしばドゥルーズ的な議論を参照しているということもあります。

ブルーノ・ラトゥールや、その辺のことがあって、それから、これもいろいろ言及されていますけれども、いわゆる思弁的実在論 (speculative realism) という流れが出てきていて、例えばものの現象学とか、そんなことが言われたりするわけです。しかもものについての現象学は昔からあるわけですから、つまりものから見た世界みたいなことを考えるという

ようなことで、それこそテレビゲームの現象学みたいなことを考えている人たちがそういうことを提唱したりというようなことをやっています。

それに対して、こうやって人類学でフィールドワークをなさっている方たちがそういう現代のいろいろな理論的動向を踏まえてこういった作業をなさっているのはすごいなと素直に思うわけです。私などはフィールドワークはできないですし、しない主義と一応自分では言っていて、本で勉強だけしているのです。フィールドワークもできれば、そういう現代のアクチュアルな議論もちゃんとフォローされているという、本当に驚嘆という感じなのです。

ただ、そういう背景がありますという話で、いろいろな興味深い話があったのですが、私の関心でいいますと、一つは、グローバリゼーションの話などいろいろあるわけですが、私も、少し資本主義の絡みというか、グローバル資本主義が背景にひたひたとあるのはもちろん皆さんは意識されているのですが、ここで、とりわけもののエージェンシーともの *affect* といったときに、商品が喚起する *affect*、商品がわれわれにどう *affect* してくれるのかという問題があると思うのです。最近読んだピーター・センディというフランスの哲学者で音楽学者の人の『Hits』という本があります。フランス語の本の英訳なのですが、英語版で増補されていて、そこにはマイケル・ジャクソン論やプリンス論も入っています。もちろん現代音楽について論じたりもする人なのですが、この『Hits』などは英語バージョンの方がいいですね。Especially for English readers というのですが、それは何かというと、ポップスとは何か。Especially for you 「あなたのためだけにラブソングを歌います」。でも、よく考えてみたら、マルクスが『資本論』で商品について言っていることはそうではないか。要するに、商品のフェティシズムは何かというと、商品は「あなただけに快樂をもたらします、満足させます」と言っていて私たちを誘惑してくる。そして、その商品の論理をものすごく

体現しているのが、まさにポップミュージカルの世界なのだという話をしているのです。

もちろん商品のフェティシズムは、特にベンヤミンが見たみたいに一概に否定されるべきものではないと思うのですけれども、もののエージェンシーで、そしてまたものが誘惑してくるというようなことを考えるとき、まさにものが誘惑してきて、情動を駆り立てるといったところで初めて現代の資本主義が成り立つわけなので、そのところのものがどう誘惑してくるかという具体的な面としては商品がすごく重要だと思います。

それから、テクノロジー、理性的なもの、情動の関係は、単に理知的なもの、知性的なもの、外の情動があるのではないという話ですね。例えばテクノロジーを使った音楽というようになことを考えたときに、あれはテクノロジーを使っていないかもしれないですけども、音楽に関しては面白いところで、ご存じのようにアドルノはもちろんジャズが嫌いで、例えば「シンコペーションが新しいというけれど、あんなものはストラヴィンスキーにあるではないか」と言っていました。彼はアメリカにいたときは結構遊んでいた人ですから、「ダンスホールに行ってみろ。ジャズのシンコペーションのリズムにみんな乗れないで、リズムがずれる」と、さすが音楽学者でその辺はちゃんと見えているみたいなのですが、「だから駄目なのだ」と言うのです。これがポール・ギルロイになると、「シンコペーションで身体がリズムとずれる。そこに何か可能性の空間が開けるのだ」という話をするのです。

最近いろいろ人文系で、もちろんアドルノやベンヤミンが議論されますし、それから、例えばベンヤミンの読解のところでもタウシグなどが人類学の世界で素晴らしい読解をしています。最近パフォーマンスタディーズなどを見てみると、英語圏で読まれているのはエルンスト・ブロッホなのですね。エルンスト・ブロッホのユートピア論を考える、引き合いに出す。そのユートピアをどこに見るかというと、例えばテクノロジーが作り出してくるリズム、あるいはシンコペーションなどのリズムに乗り切れない、リズムと身体がずれるということ

ろから、どういふ可能性を引き出してくるかということを見ているわけです。先ほどのサッカーのお話でも、サッカーの選手がすごいパフォーマンスを示してくれる。観客がそれに熱狂するとき、当然、観客の身体がそこに付いていけていないけれども、付いていけないという中で何が生まれてくるか。自分の身体はそこに必ずしも付いていけないけれども、それが単に否定されることでもなければ、また、一方で、理想的な同一化された熱狂するナショナルな共同体みたいなものを見るのでもないような何かがそこから見えてこないかということを考えるわけです。

それから、人類学的な話とはちよつと違ってくるのかもしれないですけども、この手の感情をめぐる議論で、また、特に政治的なものと社会的なものとの関係でいうと、英語圏のローレン・バラントやウェンディ・ブラウンなどが、センチメンタルナショナリティというようなことを言うのです。ローレン・バラントなど、その辺の人がメロドラマ研究などをされていますが、例えばジェファソンがアメリカ市民たる者、読まなければいけない本としてローレンス・スターンの『センチメンタル・ジャーニー』を挙げています。もちろんセンチメンタリティーは、ある意味でプライベートな空間とパブリックの空間をべたつくつつけてしまうのです。まさにジェンダーの問題なども絡めて言うと、いろいろなことを嘆く女みたいなのがいて、政治がある意味ではそういうプライベートな論理に干渉されてしまうという具合に、否定的に見られるというところもあるわけです。

しかし他方で、メロドラマ的なものというか、映画の世界で言うくと、ファスビンダーとか、アルモドバルとか、トッド・ヘインズとか、ああいう人たちはみんなダグラス・サークが好きで、メロドラマ的なものの再評価をするわけです。そして、やはりメロドラマやセンチメンタリティーというものが、もう一回、パブリックとプライベートといったものの関係を従来の近代的な市民社会論とは違う形で考えるときに、一つの手がかりになるのかもしれない



ない。それは、ミクロ・マクロということでは言えば家族です。メロドラマでは家族というだけではなくて、不倫とか、いろいろなのが入ってきています。でも、いわゆるプライベートルな領域があって、メロドラマはそれだけのように見られるわけですが、そこといわゆる国家など、もっとマクロのレベルとの関係が、例えばクイアの人たちの映画を参照していくと何か見えてくるかもしれない。emotion, sense に、sentimentality を加えていただくと、そこから何か見えてくるものがあるのではないかと思います。

情動という話では、例えば共鳴する、共振するという話があったのですが、その辺も全てもう一回振動として捉えるとか、先ほどもシンクペーションという話をしましたけれども、やはりビジュアルというか、視覚的表象に偏重していた人文系の議論に対する批判が affect に対する関心といったときにあると思うのです。やはりそのときにはセンスがいろいろ絡まり合っているにしても、聴覚の問題をもっと考えてしかるべきだと思います。もちろん皆さんが考えていないということではなくて、これは本当に考えてみると、聴覚で興味深いのは、例えばビジュアルの記憶の外部化だったら、ハイファイを追求していないのだったら、ラスコアの壁画でも何でも、そもそも人類が人類になったときからビジュアルのイメージは作っているわけです。ところが、聴覚イメージを聴覚イメージとして保存するテクノロジーはエジソンの蓄音機が初めてで、人類の歴史では一九世紀の終わりぐらいにやっと聴覚イメージを聴覚イメージとして保存する方法ができたのです。にもかかわらず、メディアの研究、デジタルメディアの研究では、常にビジュアルの話がメインで、メディア・アーキオロジーみたいなところで少し音を保存する技術の歴史の研究があるのですが、例えばラカンが耳は無意識に空いた穴だという具合に言うわけです。言うまでもなく、目は瞼を閉じれば見ないで済むけれども、音は耳をふさいでも聞こえてしまうということです。

あるテリトリーという問題を考えて、ガタリにとつてすごく重要な用語は、『千のプラ

トー』でもいっぱい出てきますが、リトルネロです。日本語訳は律儀にリトルネロと訳して  
いますけれども、英訳ではリフレインになっています。あそこで出てくるのは、一つはプ  
ルーストだし、もう一つは鳥のテリトリー形成というか、鳥が鳴いて自分のテリトリーを主  
張するという話です。ガタリは完全に鳥が鳴き声を習得して歌がうまくなっていった自分の  
テリトリーを作り出していくというテリトリー形成を一つモデルにして、脱テリトリーとい  
うようなことを考えているわけです。そういう点でも、音や音楽、もちろんこれも民族音楽  
学などの蓄積がいろいろあつて、その辺はいっぱい参照すべきものがあると思います。

最後に、情動といったことを考えたときに、音、そして全てを振動ということと考える  
と、これも興味深いのは、最近の割と若い英語圏のドゥルーズ研究者が注目しているもの  
一つに、彼が二一歳のときに書いたオカルト文献の序文があるのです。これはフランス語版  
で『*Mathesis Universalis*』というのですけれども、ドイツ語の原文の原題は違います。興味  
深いのは、ベートーヴェンが耳が聞こえなくなつて、それを診ていたお医者さんが実はヒン  
ドゥー神秘主義にはまつていて、ヒンドゥーの神秘主義を解説した本を書いていて、これが  
『*Mathesis Universalis*』というタイトルで一九世紀にフランス語訳がされています。それが  
一九四六年に復刊されて、それにドゥルーズが序文を書いたのです。しかもドゥルーズとオ  
カルト文献のつながりは、『差異と反復』の中でポストカント主義、超越論的経験論という  
話をするときに参照されているウロンスキーという、メシアの哲学を提唱したポーランドか  
らフランスに亡命してきた哲学者がいて、彼が数学的な極限の問題とカントを絡めるとい  
う話もしています。それだけではなくて、『高等魔術の教理と祭儀』を書いたエリファス・レ  
ヴィという、もともと社会主義者だった人をオカルティストにしたのがウロンスキーとい  
う人です。

さらにウロンスキーの全てでは振動だという芸術論に影響を受けた人たちには、例えばスー

ラがいたり、二〇世紀初頭のフランスの音楽、それからドゥルーズなども言及しているバレーズは「音楽の本質はウロンスキーを読めば分かる」というようなことを言っていたりする人です。これは私自身の課題ですが、そんなところも参照しながら、もう一回、全てを振動として捉えるような存在論を少し考えてみたいと思っています。その中でまた情動の話も自分の課題として考えていきたいと思っています。

ということ、ちゃんとしたコメントになりませんが、時間ですので、私はこのぐらいで終わります。

**(西井)** 浩瀚な知識にもとづいた示唆的なコメントをありがとうございます。では、続いてお願いします。

### 高木 光太郎 (青山学院大学)

**(高木)** 青山学院大の高木です。よろしくお願いします。ご紹介いただいたように、私は専門が心理学で、今日いろいろお話があった社会科学の諸問題については知らないことも多いのですが、私の目から見て引っかけたことについて少しお話をするといい形にしたいと思います。

まず私自身は、想起の問題に関心がありまして、それを具体的には刑事裁判における自白や目撃証言の理解に使うというようなことをやっています。もうひとつ、もともとこのバックグラウンドは発達心理学で、ヴィゴツキーというソビエトの心理学者の発達理論を専門にしています。今日はこの二つのうち発達心理学の話が絡むかと思えますので、そちらの方でお話します。



何人かの方のご報告の中で、共通の問題点として表れてきたのが、情動の問題を論じるときに、必然的に知性の問題を視野に入れられないといけないということです。これについては伝統的な関係づけがあつて、知性が上位で、情動が下位となる。このような枠組みをいかに乗り越えていくのかというのが、情動の問題を議論するときにまず片を付けておかなければいけない問題ではないかという印象を受けました。

このことを考えるときに、心理学の中であらためて振り返つて面白いと思う論者が一人います。アンリ・ワロンというフランスの心理学者です。一九〇〇年代中盤に活躍して、なくなつたのが一九六二年で、教育学者としても知られており、ユネスコでも仕事をしています。この人の発達理論は「情動」をベースにしているのですが、発達心理学の中でもかなり奇妙な位置を占めています。彼は知性も含めた認識の発達の基盤には情動があると考えます。そのときの情動の定義が非常に面白いわけです。

まず彼は人間のやっていることを外界作用的過程と自己塑形的緊張という二つに区分します。例えば、今ここに時計がありますけれども、この時計をつかむときに、つかんでこちらに引き寄せるといふのは、まさに身体が外界に作用して何か効果をもたらすという機能的な過程です。このとき手を持つていつて時計をこちらに引っ張つてくるという動作をするためには、筋肉を緊張させて体を安定させなければなりません。柔軟な動作のためには身体を緊張させなければいけないわけです。ロボットみたいにパーツが固定されていれば、そういう必要はないのですけれども、人間の身体は脱力してしまうとぐにゃんとしてしまいますので、外界に作用しようとしたら必ず緊張しなければいけない。例えばダンサーなどの極めて柔軟な動きであつても、単にぐにゃぐにゃなだけではなくて、必ず緊張のモメントがあるとということです。このように柔軟で機能的な過程（外界作用的な過程）と身体を緊張させる過程（自己塑形的な緊張）をセットにして人間の問題を考えようというのが、ワロンの基本的

な理論構成になっています。

ワロンは自己塑形的緊張と情動を結びつけて考えます。生まれたての子どもは外界作用的には究極の無力です。裏返して置いておくすぐに死んでしまうというぐらいい何もできません。彼／彼女にできることの一つは泣くことです。泣くというのはまさに全身を緊張させて、「表情」を表出させるということであって、これが他者を引き込む効果を持っている。つまり周囲の大人から養育を引き出す効果があるということです。

これはワロン以降の発達心理学の研究成果ですが、例えば非常に幼い子どもでも、大人の表情に対して共鳴的な表情を取ることができます。大人が口を開けると子どもも口を開けるといったものです。これもよく考えると不思議で、子どもは一回も自分の顔を見たことがないのに、大人が口を開いていると自分も口を開けるといふ共鳴的な動作を取れるわけです。いずれにせよ、非常に幼い子どもは、例えば大人を引っ張ってくるといった外界作用的な働きかけができません。もちろん言語を使って呼ぶこともできない。しかし、全身を緊張させることによって他者を引き込んでくることはできる。つまり、子どもと他者との社会的な関係の原初的な形態は、実は情動的で表情的な表出と、それに共鳴してきて引き込まれる他者との関係性にあるのです。ワロンは社会的なものの基盤をこのように捉えるわけです。

非常に面白いのは、自己塑形的緊張では、情動を体の内部から何かむずむずしたものが出てきて、それが外部に向かってぱんと炸裂してしまうようなものではなくて、世界に対する主体の関係のあり方の全体が身体の表情性あるいは緊張性として表出されたものとして捉えている点です。つまり、表情あるいは情動というのは世界に対する向かい方なのです。世界に対して具体的に作用するのは外界作用的なプロセスですけれども、作用するときには必ず、なんらかの姿勢を取ります。この姿勢は、その時点での主体の世界に対する向かい方の表現であるということになるわけです。身体を固めること自体は何ら外界に対する作用には

役立つ。作用のためには身体を動かさなければいけない。しかし、身体を緊張させることによって、その人の世界に対する向かい方が他者から読み取れるようになる。それは単なる内的な衝動の炸裂ではありません。

別の見方をすれば自己が表情をもって世界に向かう姿勢は、同時に世界のあり方そのものの反映でもあって、これらを切り離すことはできないということになります。それゆえワロンが情動と呼んだ自己塑形的緊張、すなわち身体の表情は、表象の基盤だと考えられるわけです。ワロンの理論は非常に難解で、発達理論としてどこまで適切か分からないのですが、表情化した身体によって同時に表現される世界と自己のあり方が、いわゆる知的な表象の基盤にあるという考えは重要だと思えます。

普通は知的で表象的なものと、情動的なものを何となく二分法的に捉えて、どちらがより本質的だといった凡庸な論になりがちなのですが、ワロンに関して言えば、他者や世界に対する情動的、共鳴的な関係性から表象が生まれ、それが知的なものに結びつくという議論をしていて両者を分断しません。情動としての表情を通して共鳴関係が他者と築けるという意味で社会的であり、かつ世界についての表象の基盤になるという点で、知的なものとも分かちがたく結びついている。このようにワロンは主張したわけです。

こうしたワロンの主張自体がどのぐらい、現在の発達心理学の知見からして妥当性があるのかということは本当は検証しなければいけないのですが、残念なことに彼の理論が難解すぎて、多くの心理学者はもうあまり読まなくなってしまうです。ですから、ちょっと放っておかれているというのが現状です。ただ、このアイデアは非常に面白くて、ワロンの情動と知性の関係、あるいは身体、表情、情動といった系をある種概念的な道具立てとしていろいろな問題を考えられるのではないか。今日の一連のお話をそうした視点で考えてみたいと思えます。

最初に岡崎さん、それから、久保さんにお話しいただいたサッカーの話です。試合を見ているお客さんは、プレーしている選手たちの身体の表情に対して共鳴的に関わってしまいません。「サッカー的な身体」の共鳴であり、情動的な状態なわけです。先ほどのワロンの話で言うと、このような共鳴が、「サッカー的な知性」の基盤になっっているはずだということになるわけです。プレーヤーはまた別枠で考えた方がいいですが、観客については、周囲と共鳴しつつ選手のプレーに没入しているときの身体というのは非常に興味深いと思います。「周囲と共鳴しつつ」ということで考えることとしては、例えば熟練したサッカーの観客は素人よりも一歩早く叫び出すのではないかとということです。僕はサッカーはど素人で、ワルドカップぐらいしか見ないのですけれども、テレビ解説の松木さんが「わあっ」と叫ぶと、それに引つ張られて試合の流れを追いかける。松木さんより早く叫ぶことは僕はないのですね。彼はプロですから、選手のプレーに対するプロの観察者としての身体的な共鳴に私の素人の身体が引きずり込まれて、サッカー的身体として、より知的な方向に導かれるということです。松木さんはあまり説明的な解説はしませんが、叫びが、試合の重要な局面は何だとか、どこを見るべきかといったことについて、身体的、知覚的な導きとなっている点は非常に面白いのではないかと思います。

例えばイギリスのサッカーパブみたいところに長年通い続けていると、そこでの共鳴を通して身体が作られ、さらにそこに言葉が乗ることによって、サッカーの観客としての学習というか、文化が進んでいくのではないか。そういう意味で、サッカーの知性の基盤として、共同観戦的な熱狂には非常に重要な意味があるのではないか。先ほどのワロンの議論からすれば、こういう見方が当然出てくるだろうと思います。

それから、田中さんの感情労働のお話で、僕が非常に興味深かったのは、これはワロンの射程を完全に越えているわけですが、ある程度発達すると表情のコントロールができるよう

になるという点です。つまり、表向き、自分がどういう世界に向かっているかを相手に悟らせないように身体を塑形することができるようになるということが起こるわけです。これは発達心理学的に見ると、「内面の発生」ということができると思います。自分が今、思っていることが他者から見えないという状態を作るとというのが内面の発生だとすれば、それと自己塑形的な身体を意識によるコントロールがすごく深く絡んでいる可能性があまりあります。つまり、情動を知的にコントロールすることによって、「主体」が発生するという理解の可能性です。こういうこともワロンの理論と絡んでくるかと思います。

床呂さんの真珠貝のお話は、表情的な共振や共鳴が、人間の場合はモノにも向かうことができるのだということを非常に明確に示すものだと思います。廣松涉みたいに世界の全てを表情的にとらえるという話とは少し違いますが、われわれは相応なモノにまで表情を読んで、それに勝手に共振することができるとはいい、共振の対象は同じ種だけではないのだというところですね。愛玩動物の熱狂的にかわいい写真に対して、人間の子どもに対すると同じように表情的に共鳴するというのはよくわかります。しかし今日の床呂さんのお話だと、驚くべきことにわれわれは卵だとか眼鏡に対してもそれができるといふことになります。非人間的なものに対しても表情を読み、それに身体を共鳴させていくことができるとするならば、そのような人間を基点として、人間と非人間の区別を無意味なものにする視点について考えることもできるかもしれない、そんなことを思いました。

岩谷さん、内藤さんの場所をめぐる問題も非常に面白い。われわれは場所や空間というと、つい容れ物的なメタファーで考えてしまいます。これに対して身体の延長としての空間というお話があり、その部分が僕にとって非常に面白かったわけです。身体の延長としての空間というのをワロンの視点で捉え直すなら、表情同士が共鳴している人々のネットワークみたいなものということになるでしょう。器としての場所の中に人がいるというよりも、人と



人が共鳴的に関わることによって、位相空間のような形で場が開かれてくる。そういうネットワーク的なものが、外化された外部を生み出したり、可能にしたりしていく。あるいは場合によっては、こうして生み出された物理的な外部が位相空間のほうの組み立てに影響してくる。だから、空間、場所の問題を考えるとときに、情動的な身体の共鳴によって作られるネットワークの位相空間と、客観的、外的な、入れ物的な空間みたいなものを選び分けて、その関係性を見ていくことで場所の問題を整理してみるのもありかなと思った次第です。

最後の真鳥さんのお話は、途中まで、どうしたらいいのだという感じで、ややぼうつとしていたのですが、最後の最後に非常に刺激的なお話を頂きました。集合的生の極限性や、個の生の極限的な状況の問題をお話しになったときにでてきた、孤独や戦争の問題です。これはもちろんワロンの射程を完全に超えていると思いますけれども、ワロンのみても非常に興味深い問題です。孤独というのは要するに、他者との表情的な共鳴ができない状態です。この状態にあつて、われわれにとって情動は可能かということが問題になると思うのです。情動が他者との身体的な共鳴を前提としているならば、絶対的な孤独においてわれわれは情動を持っていないかということが論理的に導き出せます。同じように、例えば戦争やカストロフィーと言われるような状況は、もしかするとわれわれが外界作用的に働きかけて、そこで身体を表情化する、つまり情動を喚起することが困難な対象かもしれない。そこでわれわれはなすすべもなく、自分の体を一つの情動として塑形することの困難に陥り、いわば身体が解体されるような極限状態が生まれてくるということです。そのような対象が災害であり、戦争であるということです。ここから、災害や戦争においてわれわれに情動は可能なのかという面白い問が立ち上がってくるのではないのでしょうか。そんなことを考えた次第です。

ふつうコメントにコメントはしないのですが、田崎さんのお話で音の話が僕にはすごく面

白かったので、最後に少しコメントさせていただきます。ワロンは明らかに視覚ベースです。表情を見る、見られるという関係が基盤ですから。それゆえワロンの視点で情動の問題を論じるときに、音の問題をどうクリアするのかというのは結構面白い。そう考えていて、松木さんのことをまた考えました。「うわー」みたいな叫びに引きこまれていくというのはまさに音の世界での共鳴であり、われわれは決して視覚の回路だけで共鳴しているわけではないようです。だからこそ、われわれはラジオでも熱狂できるのだと思います。ラジオ実況の分析などは、きつとすぐ面白いのだろうと思います。なぜ見ているかのようにあそこに身体が没入できるのか。その実況の技術の推移みたいなものはすぐ面白いテーマになるのではないかと、最後にそんなことを考えた次第です。以上です。

**(西井)** ありがとうございます。もうまとめていただいて、これで終わりという感じですが。いろいろ面白いコメントを頂いたので、簡単に発表者の方から一言ずつ。まず久保さん。

**(久保)** 僕は発表者ではないので、どう反応しようかというところなのですが、まず田崎先生のコメントに関しては、僕と岡崎先生は似ているところと違うところがすごくはっきりしているというか、同じところに興味を持っているところがあって、ちよつと違うところがある。多分それはグローバル資本主義ともの *affect* という形で言われたようなものについてどう考えるかというところなのだと思うのです。僕はある意味で岡崎先生の視点というか、コートジボワールの音楽が鳴りながらサッカーがされていて、みんなが動いているということに対して、それは非常によく分かる一方で、それと対比させているのが、例えばジダンのプレーをスローモーションでアップに見せることでユニフォームが売れて、世界ツアーが可能になるという、ただ、その両面があるということの関係はどう考えればいいかというところが一つあります。

これは高木先生のコメントに対するコメントが交ざってしまうのですけれども、僕が今日

言おうと思っただけで言わなかったことは、僕の情動的な身体の反響関係がサッカー的な知性の基盤にあるという言い方は、プレースタイルに対しても言えると思っただけということ。各国のサッカースタイルを作っているのは、例えばブラジルのジンガのように、サッカーのフィールド以外のもの、つまりストリートサッカーです。「天才はストリートから生まれる」というのは、サッカーに対する神話としてずっと言われてきたことです。それは、ストリートを失えば特徴を失うことです。それを最も進めたのがドイツなのですね。標準化をして、すごくきれいなグラウンドを何面も作って、そこできちんとして標準化された、みんながうまくなるようなトレーニングシステムを作っていて、それを日本が思い切りまねしていったのですが、日本がまねをし切ったぐらいのときに、ドイツはそれをやめるのです。やめるといえるか、ストリートサッカーがなくなってしまっただけで、凡庸な選手しかいなくなったのです。そこで、ストリートサッカーの要素を、標準化されたフィールドに作り出すのです。ですから、ストリートサッカー的な、通常のフィールドにないような障害物や、おかしな傾斜などを作って、そこで教育された選手たちが今の主力になっています。ただ、それは同時に、ドイツサッカーがトルコ移民やアフリカ移民を代表に取り込められるようになっていく契機でもあるのです。

だから、ある意味ではサッカー的な知性、つまり、情動的なものが知性的なものの基盤にあると考えることには僕はすごく賛成なのですが、同時に、そこから一回切り離されたような標準化ができるようなモメントがある。だからこそポップミュージックみたいなものが世界中に広まる一方で、それがもう一度、ストリートサッカーの要素を取り入れたフィールドにまたさらに外部のものが入ってくるというか、いろいろな移民の人が入ってくる。それは要するにドイツの移民国家としての全体としての能力が試されるというか、そこを全部左右してくるような話だと思っただけですけれども、そこでもう一度、相互作用が起り続ける。そ

ういうところで情動と知ということの関係を考えていけたらいいのではないかと考えています。コメントしました。

**(西井)** ありがとうございます。発表者ではなかったけれど、コメントへの応答をありがとうございます。次は、田中さん。

**(田中)** どうもありがとうございます。田崎さんは、特に直接のコメントはなかったかもしれないですね。

**(田崎)** そうですね、コメントというよりは、誘惑がという程度の話ですよ。

**(田中)** 僕自身は、田崎さんへのちよっとした愛をと思って、エロスの定義のところに一応スカリーの言葉を入れました。昔お会いしたときにスカリーの話をしたというのと、もう一つは、もう一昔前のお仕事ですけれども、田崎さんは売春をセックスワークとして捉えましょうというので、現場の人とずっと仕事をされていたと思いますが、私は田崎さんの後をずっと追いかけているような感じで、この二三年、いろいろなところでセックスワーカーの人に会って話を聞いて、労働として捉えるとしたならば、その実体は一体何なのか、と問いかけています。こういうことを調べたくなかったのは、田崎さんの間接的な影響だと思っているのです。そこから感情労働や官能労働を一方で出してきた、もう一方で、運動論とは一体何なのかということを考えているところです。

もう一つ、高木さんのおっしゃる通り、私は、内面がむき出しになるような状況を求めているし、そういう状況にいかにか他者を引き込むのかということに関心があります。そういうことを実際にやれたらいいなこと、その一つが誘惑だと思えますし、他にもいろいろあると思います。

**(西井)** ありがとうございます。では、床呂さん。

**(床呂)** どうも、お二方、コメントをありがとうございます。まず田崎さんのコメントから

ですが、いろいろな出された論点は、初めて聞くような話も結構あって、それ自体、非常に勉強になったのですが、私の報告に関する部分で若干レスポンスさせていただきます。

もののエージェンシーという話と、もう一つのものの affect というキーワードを出されて、私もこの二つ、特にものの affect です。これは釈迦に説教みたいな話ですが、ラトウールや、アルフレッド・ジェルにしてもそうですね。これは釈迦に説教みたいな話ですが、ラトウール主義を相対化するといったときに出来るキーワードは、エージェンシーの話は比較的、既にかなりされ尽くした感があるのではないかと気が個人的にはしています。そうすると、もう少し、今日出した affect といいますが、情動、感情、あるいは僕の出したキーワードだとエンパシー、お二方が出されたキーワードで言う共感、共鳴という、そこからもう一回、人・ものの境界 (human/non-human boundary) を越える一つの手がかりがあるのかなということ、人類学以外の方からも、これはお二人ともですけれども、ある種、示唆を受けたのではないかと思つて、そういう意味では大変ありがたいコメントだと思います。

それから、もののセダクションの話も、それ自体がセダクティブな魅力的なテーマで、今日はものの生産の現場の話でしたけれども、もちろん最後の消費やマーケットの問題での商品化の問題、グローバル資本主義の中でのもののセダクション、それこそ田中さんのフェティシズムの話とも非常につながると思いますが、それは今日は時間がなくて言えなかつたのですが、それが一つです。

それから、田崎さんのコメントで、テクノロジーと情動の関係です。それがある種、二項対立的に見るのではなくて、テクノロジーを駆使した音楽であるとか、さまざまな事例を出されました。私も、音楽ではないのですけれども、一つ、少しだけ今日も触れましたが、テクノロジーと感情の問題をすごく面白いテーマだと思つています。医学部の人たちが苦労しているとか、そういうレベルだけではなくて、もっと中心的な生命科学のパラダイム自

体の中に、実は、私が仮想敵と挙げたような、デカルト的な機械論と言いましたけれども、それ自体の中に非常にパラドキシカルな人間中心主義と、それをある種、裏切るようなものが胚胎しているのではないかみたいなことを考えています。それを今日は言う時間がなかったですけども、あらためて喚起されたということです。

それから、高木さんのコメントでも非常にシャープにポイントを指摘していただいて、人というのは驚くべきことに、同種の人、個体以外の存在に対して、ものに対してもいろいろ表情を読み込んでいくというようなことです。今日は時間がなくて、参照文献のリストに出しながら全然言及できなかったものが本当にたくさんあって申し訳ないですけども、一人だけ挙げると、主な参照文献の初めの真ん中の少し下ぐらいに、翻訳書ですが、『誰のためのデザイン?』という本を書いた、すごく有名なノーマンという人です。『エモーショナル・デザイン』という本を書いていて、要するに、もののデザインと、そこにある種、情動や感情みたいなものがどのように関係している、していないみたいな話なのです。

そこにも、高木さんのコメントではないですけども、人間というのは単にファンクショナルに、例えばコップでも持てればいいのかということではなくて、人間の顔の表情とは違うのだけれども、使い勝手とか、親しみやすさとか、そういうことも含めて、ある種のエモーショナルな側面がすごく大事なのだという話があって、人間は潜在的にいろいろなものに表情をかなり読み込んでしまう傾向が生得的にあって、そこは先ほど真島さんが最後にちらっとおっしゃった、河合さんにも関係する進化的な話にも落とし込んで、要するに、ヒト個体が、未知の物体Xが出てきたときに、それを心あるものと見るか、見ないかというところ、最初の前提としては、むしろ心ある存在と見た方が生存上有利なのだという説明もするわけです。つまり、全く自然現象でランダムにアクションするよりも、何か特定の意図なり、心なり、感情を持った存在としてリアクションする方がいいのではないかということも言ってい

るのです。ただ、私自身はそういう説明も面白いと同時に、若干留保したい。それは話が長くなるのでやめますけれども、いずれにしても、先ほどおっしゃった共鳴の問題と、ことをキーワードにしながら、人間、非人間境界の相対化みたいなことを少しまた突っ込んでいくヒントを頂いた気がします。どうもありがとうございました。

(西井) では、内藤さん、お願いします。

(内藤) どうもありがとうございます。高木さんの方からお答えしようと思います。空間を昔よくあったように入れ物的なものと思えずに、身体の延長として捉える。そのときに、さまざまに共鳴した人間同士のネットワークが時々どういう位相空間を見るかというところにコメントを頂きましたが、まさにそういうことに注目していました。事情としては、アサイラム空間という話を途中で紹介しました。これは事例の話ですが、難民キャンプは基本的に五年以上ずっと難民状態が続いて、要するに入れ物を変えることができないわけです。だから、やや卑怯な方法ですが、最近の状況ではアサイラム的なのは脱領域化している。あなたたちも彼らもみんなアサイラムから出られないのだから、その物理的空間をどうやって変えるのか、変わり得るのか。そこに目を向けましょうみたいなことを言っていたのが、アサイラム空間という概念を使ってやっていったことです。整理していただいてありがとうございます。

もう一つは田崎さんの、これは関係あるかどうか分からないのですが、センチメントについてのお話です。センチメンタルナショナリティのメロドラマなどの話で、あまり僕は詳しくないのですが、難民、あるいはロマなど、グローバル化の中で下層の階級に追いやられた人々がこういう感情を抱きやすいような気がするのです。メロドラマを見てもそう思うでしょうが、要するに、あるべき国家や家族との関係を想起させるような体験とは何かというと、難民になることであるとか、ロマみたいな、ストーリーから排除されるような状況のと

きにセンチメンタルなナシヨナリテイーみたいなのを抱くかなと思います。

実際に岩谷さんとメールを何通かやり取りしたときに、ストリートから排除されたロマの人々が、意外にインド系の映画をよく見るようになってる。つまり、彼らは一応インド系のルーツだと言われているので、自分のルーツについて想起するような機会が増えているのではないかという話もありました。また、難民キャンプのようところは、国家のシステムの特外ではあるのですが、そこそが最もナシヨナリズムが高まっている場所であるという研究もあって、そうかなとも思ったりする一方で、多分これは真島先生に対するコメントだと思うのですが、高木さんのコメントで、孤独の問題みたいなところでは、難民キャンプで、あの人たちは意外にからつとしていて、絶望など、いろいろ言ったのですが、ああいう感じというのは働きかけが困難です。彼らの働きかけだけでは基本的にあの仕組みからはどうにもならないわけです。そういう状況に直面したときの人間のあり方として、情動を持っていない状態とも言えるのかと思ったりして、彼らがやっているセンチメントと情動をそもそも持てないという二つの話を頂いて、整理する上で非常に刺激になりました。ありがとうございます。

音については今日は説明しませんでした。携帯は声の文化ベースでやっているの、ラジオと違って、耳をふさがないといけないようなもので、パーソナルメディアなので違うのですが、基本的には声のメディアはリテラシーが要らないので、アフリカでも爆発的にはやっつけて、多種多様な人々が、底辺だろうが、かなり使えるようになっていて、面白いことが起こっているというようなところでした。

**(西井)** ありがとうございます。

**(真島)** 孤独と死の関わりについて少し言い添えます。エスノグラファーは、いうまでもなくフィールドで、しばしばひとの死に立ち会います。私も、死の場面にはいくども立ち会っ



てきました。エスノグラフィアーも有限者である以上、死そのものを体験し分有することはむろんできませんが、それを死として受けとめる立会人のなかには、おなじ有限者の資格をもつて連なることができるでしょう。その延長で、たとえば死の現場では、エスノグラフィアーも、ある情動に襲われるのだと自然に想定してみたくなくなったりもする。ところが、高木さんの先ほどの発言にたいして内藤さんがいま鋭く反応されたように、エスノグラフィアーならば、そうした場に立ち会いながらも、「情動が持てない」状態にたいする自己の外部性を感知できるかもしれない。さまざまなディシプリンが行き交う学問の制度のなかで、「ならば人類学とはいったいどんな学問なんですか」と問われたときに投げ返せる答え方のひとつが、こうした点にあるような気がします。人類学、民族誌学だけは、いわば「身のほど」を知っているのだと答えたりすれば、人類学のどっちつかずにたいする伝統的な批判の一式が、またもや再開することになるのでしょうか。

内藤さんの御報告をうかがっていて、ひとときわ見事だと感じた部分があります。内藤さんは、UNHCRからキャンプの人びとに配給される食糧と、現実にキャンプの人たちが口にしていく食糧を、生態人類学の流儀でひたすら誠実に調べられた。そしてその結果が、先ほど示された一覧表としてまとまった。しかも、精査の対象とは、この場合まさに生の糧、食糧にほかなりません。身のほどを知らない研究者であれば、あの表を示したあとに、「人権」とか「安全」とか、いくらでもことを継ぐことができたはずですが、しかし内藤さんは、確かな民族誌家のひとりとして、表をしめしたあとでも、そのようなことをいっさい語ったりはしない。先ほどの表で、赤字で示されたままの生がある。そこに示されたものの背後につづいてくはずの何事かを、聴き手が感じてくれさえすれば、あるいは想像してくれさえすれば、情動さえない場面、その翻訳不可能な場面の存在だけは聴き手に伝わるはずだという思いが内藤さんにはあるからだ、私はつよく感じました。たいせつなことを学ばせていた

Ⅲ コメント

だいたような気がしています。

## IV 全体討議

(西井) ありがとうございます。それでは、時間もあまりなくなってきたので、質疑応答の方に行きたいと思えます。どなたか。

(里見) 一橋大の里見と申します。非常に簡潔に、床呂先生に一点だけお伺いしたいのです。高木先生はコメントの中で、僕の理解では、床呂先生の特に真珠貝の事例を、人間は人間以外のものに対しても表情を読み取り、そうすることを通じて共鳴することができると示した、人間はそういう能力を持っていることを示した事例であるとおっしゃったと思います。そのことを言い換えて、人間と非人間の境界線を争点化するような議論を人間を基点にして展開するという見通しを床呂先生が示されたらと高木先生はおっしゃったと思うのですが、人間を基点にした議論だったという受け取り方に対して、床呂先生はどうおっしゃいますか。「はい、そうです」とおっしゃるか、「いいえ、人間を基点とした議論ではありません」とおっしゃるか、その点についてご説明をお願いします。

(床呂) ありがとうございます。そこは非常にいい質問だと思いますし、答えるのが結構難しいです。恐らく高木さんご自身も重々ご承知のように、高木さん自身、まさに心理学の中では状況派であり、ヴィゴツキアンの方ですので、そこで「人間の能力を」と言っても、その能力のキャパシティーの中に恐らく例えば道具やもの、まさに記号やシンボルも含めて、もの (non-human) とのハイブリッドみたいなことは恐らく入っているのではないかと、間違っていたら後で訂正をお願いしたいのですけれども、私はそう思うわけです。ですから、そういう意味ではそうかなとも思います。



ただ、確かに字面だけでいうと、今、里見さんがおっしゃったように、最初に人間中心主義の相対化と言っておきながら、最終的に人間のキャパシティーというところに還元するという議論にもしなるとすると、それは若干、語彙矛盾ではないけれども、完結していないのではないかみたいな突っ込みは可能かと思うのです。ただ、今日はあまり出されませんでしたけれども、それこそヴィゴツキーから、佐々木正人さんなどのグループと一緒にやっていたら違ったいろいろな状況派の研究では、むしろもの研究に逆にすごく触発された。その中では、高木さんをはじめとする人たちは、そういうキャパシティー、能力にしても、知性にしても、エージェンシーにしても、何にしてもそうでしたけれども、決して個体中心主義としての個人が主体だという発想では最初からないのであるか。初めからその辺が崩されているのではないかとちょっと思ったのですが、そういう理解でよろしかったでしょうか。

**(高木)** 床呂さんのレスポンスを伺っていて、僕は一点、大事なことを言い忘れたなと思いました。それは何かという擬人化の問題です。われわれは、いろいろなものに人間ぽいものを感じてしまう。たとえば点が三つあつたら顔に見えてしまうとか。このように人間の側の認知能力で対象を勝手に読み込んでしまう話だとしてしまうと、えらくつまらなくなるのです。

そうではなくて、むしろ表情的なものは、僕はこの点はギブソニアンの立場を取るのが一番適切かと思うのですが、環境に実在する「情報」だと考えるべきだと思います。ギブソニックな考え方で言うと、環境に情報は実在しているのだけれども、それをピックアップできるのは、その情報をピックアップする力能を持っている種でしかなくて、表情については、人間はできるらしいということになります。菅原和孝さんの議論などを考えると、猿も結構いけるのではないか。では、バッタはできるかどうかはちょっと分からないという感じになるわけです。さきほどのコメントで人間を基点にして考えたのは、人間がピックアップ

可能な環境に実在する情報としての表情性みたいな部分を考えるとというのが筋なのかなという意味です。

(田崎) 先ほど床呂さんが進化論的な議論について留保があるようなことをおっしゃっていましたが、進化論的な話でも哲学的に考えると興味深いです。例えばベルクソンが、なぜいろいろな生き物の目は似た構造をしているのかというのを問うているわけです。それはギブソンなどの話にも通じるのですが、要するに光というものに対応するというか、例えばアリストテレスなどでも、デユナミスを考えるときに何を言っているかというところ、ものが見えるためには、目が見る能力を持つているだけではなくて、ものの側に見られる能力がなければいけないということです。

ポテンシャルティーやバーチャリティーがアクチュアルになるとときには、何が起こっているかというところ、ものの側が見られたり、聞かれたりする能力を持っている。それがアクチュアルになるということなのであって、決してある種の単純な構築主義みたいな形で人間の知性や人間の能力が実在というものを構築しているという話ではないのです。そこは本当に、それも協力して作り上げていく。だから、いわゆる表象と言われるようなものも全部そうやって協力関係の中で作り上げていくという話を、本当は進化論でそういうものをきちんとしていくという話なのだと思うのですね。人間を基底としてというのはそういう形で、それぞれの生き物がそれなりにピックアップする能力も違うのかもしれないけれども、いろいろなどところにあるものという、すごい潜在性というか、力能としては、ものというか、世界が持っているのだという、そのところからです。だから、存在の基点からいったらリアリズムだというのは、決して構築主義とか相對主義みたいな話ではないというところがあるのだと思うのですね。

(西井) 他に。では、黒田さん、お願いします。

(黒田) いろいろなことがいっぱいあって、先ほどから私も高木さんのコメントが、人間の心理学的な能力に還元するという方向に行ってしまうと面白くないなということを考えていましたので、先ほどの質問で紹介したのです。結局、情動だとか、感情だとかというときに、この間議論したときに、*affection*、要するに人間の能力としての情動で世界を認識していくとどうなるかということではない。だから、そういう意味で外界というか、インタラクションの中で喚起される *affection* という立場を一番最初に重要な捉え方として認識しています。

もちろん *sense* とか *emotion* とか、どちらかといえば人間側が主体になっていくような世界認識のきっかけとしての情動がもちろんあるわけで、無視することもできなければ、*affection* と *sense*、*emotion* はまさに両面、あるいは点滅するように入れ替わるということがあるのです。けれども、人類学として情動の面から現象を捉えていこうとすると、人間にとつて何がどのように立ち上がってくるのかという、その微妙なところですね。人間の能力に還元することなく、しかし、より人間の主体性をまさに能動的受動性という境界的なところで現象論的にもう少し丹念に見ていく。それが具体であったり、一貫性のもののディテールにこだわるといふことでした。前のデイスカッションを私なりに理解して、そう言うただけなのですが、その大事さが今日のシンポジウムでもはっきりしたかと感じています。

(西井) ありがとうございます。すみません、いきなり振ってしまったのですが、黒田さんは霊長類のボノボの研究者で、ボノボと一緒に同じものを食べて、森の中で寝てというような、非常にフィールドワーカーとしても卓越した、かつ、どこに行ってもコメントできるという方なので、いろいろ参加していただいています。

では、せっかく来ていただいたので、佐藤さん、どうぞ。

(佐藤) 京都文教大学の佐藤といいます。今日は話の端々に発達心理学のお話やサッカーの

話が出てきて、私はもちろんワールドカップ漬けの日々を送っていますし、娘が生まれて一歳六カ月で、本当にやまだようこさんの本などを読みながら子育て中なので、最後の高木さんのお話も本当に体に染み入るように共感できる話だったし、田崎さんの振動の話も、全てが振動であると感ずる日々を送っていたので、全体的にはすごくよく理解できたというか、筋が見えてきた感じがします。

それをそれぞれの方の発表に即して言っていくと、情動が *sense, emotion, affect* を全部含んでいるのかどうかということが論点としてあると思うのですが、僕も出発点になっているのは *affect* という言葉ではないかと思っています。最初のきっかけは、この時間の研究会のときのスピノザのアイデアというか、スピノザが世界を理解しようとしたときに、あらゆるものの触発というか変容によって世界ができていくという次元論的なもの見方があって、それが身体が精神にある種の影響を及ぼしていったときに、ある形を取っているだけであるというような、人間も、ものも、自然も区別しないような一元論的なもの見方で世界を見ようというようなアイデアが今の人類学を考える上で刺激的な視点になるのではないかと、というところが出発点だったと思っています。

ですから、私はそのアイデアというか、われわれ人間の主体、一人一人の主体、個体は、もちろんかけがえないものではあるのですけれども、それが本当に世界を包む波動みたいになっていると言うと何かオカルト的な表現になるのですが、そういうものの中にたまさか成立しているような個性性なのであって、常に外からの刺激やものとの関係の中で循環的に立ち現れてくるようなものにすぎないのだという視点を、今、私たちがものを考えたりするときに持つと、何かすごくいい感じがするのではないのかなということが、この研究会、科研の根底にあるアイデアなのではないかと思っています。

もちろんそこには、これは久保さんがおっしゃっていたことですが、落とし穴があ

ります。つまり、今のグローバル資本主義や生政治は、そのメカニズムを利用しているという事です。それを利用して商品を売るとか、私たちの日常生活をさいなんでいくというようなことが実際問題として起っているということです。だから、それを例えば情動的な触発がわれわれの生を豊かにするのだということを一方向で言う必要はあるのだけれども、他方では、それは既に利用されているというか、流用されているというか、そういう側面があるという両方を見ていくべきであり、「情動はうざい」みたいな話になってしまっはいけないと思います。

私たちとしては、それをさまざまな現場で、その微妙な綾というか、どちらに転ぶか分からないような流れと、そこから立ち上がれる *affection* みたいなものの記述をしていくということ、どちらに転ぶか分からないような私たちの生の流れのあやみtainものを描いていけるのではないかと思っています。具体的には、映像、視覚と聴覚の話が面白かったです。というのは、私は最近、前にも言ったのですが、震災の経験を語った人を映像で記録して、それを見るところという経験のことを少し考えているのです。そこでは聴覚というか、音のリズム、語りのリズムがすごく大事で、それと表情がオーバーラップするときに自分の中から何かが発せられているという感じがすごくあるのですが、まだ全然そこはうまく言えないのです。面白かったのですが、全然まとまらないですみません。以上です。

(西井) ありがとうございます。

(田崎) 高木さんのコメントと今の佐藤さんのお話も聞いてちょっと思ったことなわけですけれども、サラ・アフメドという人が『Cultural Politics of Emotion』という本を書いていたりして、それから、それに影響を受けたプアルという人が『Terrorist Assemblages』という本を書いているのですが、そこではハイデガーを使いながら議論しています。不安という気分は、思考的な経験ではないので、世界の中に対象を持たない。しかし恐怖は、恐怖の元とい



うか思考の対象を持っているのです。それを踏まえながら、プアルという人はスイク教徒系のレズビアンレズビアンの女性なのですけれども、アメリカの九・一一に関して言うのは、要するに、レイシズムとは何かという不安を恐怖に置き換えることだということです。つまり、そのときに、例えば「こいつは悪いやつだ」「こいつはアラブ人だ」と言ってスイク教徒を殺してしまったりするのです。アイデンティフィケーションはいつもミスアイデンティフィケーションなのだと主張するのです。

明白な世界内の事物に対して *affect* が付与されて、何かが自分に *affect* をもたらしているのかということアイデンティファイする、あるいは先ほどの情動と知性を考えるときには、そのところのメカニズムが、実は、例えばそういう場合に不安に耐え切れなくて、世界全体の表情としての情動といったものを世界内の何かに付与しようとする。これがもしかしたらある種の逃避というか、置き換えだったり、スケープゴートみたいなものだったりするかもしれないというようなことを考えながら、*affect* の問題を考えていった方がいいのかと思うのです。

これはジラールがスケープゴートということに変なことを言っていますね。原因を探すということ自体は、誰か犠牲者をでつち上げるといこととイコールだったとか、そもそも人間は最初はそういうロジックは考えられなかったのだということ言っています。実は個体化するということは結構やばいことなのかもしれない、だから *emotion* といったものを単純に礼賛できないというのは、とんでもない、「あいつが敵だ」「あいつを殺せ」というリンチみたいなことをあるところとするわけで、そこに伴う *emotion* や *affect* と別世界そのものを感知、感受して何かをやっている *affect*。それもまた単純に二項対立でいいものと悪いものに分けてもしょうがない気もしますけれども、ただ、その辺のところを見ておかないと、知性みたいなものだけ利用されたら、今度は *affect* や *emotion* は魔性という話だけになると、

恐らく何かを見過ごしてしまうのだろうと思いました。

**(西井)** ありがとうございます。今日の議論は最後にだんだん盛り上がりつつ、まとまってきたような気がするのですが、せっかくだらしたフロアの方。

**(中尾)** 民博の中尾と申します。西井先生にお伺いしたいのですけれども、最初にあったお話は大体事例で、怖い感じがする、でも最後は結局、何も感じないとか、感じないというようなレベルに達する。例えば床呂先生のお話だと、表情を感取すると言われたように、ある種、認識可能なものとして身体があるのとは違うような、ただ認識できないようなものとしてある。ものとは限らないのですけれども、いろいろなもの、開かれた身体といったもので感取できない、共鳴しているかどうかも分からないような関係ということを、どう位置づけていいのかということをお伺いさせていただきたいと思えます。

**(西井)** ありがとうございます。位置づけるところまでできないのですが、先ほどおっしゃっていたように、つまり、もう何も感じない。でも、感じないけれども、結局その状況では彼女は身体的には非常に共鳴して、他の人と一緒にわあっと走り回ったりしている状況なのですね。つまり、意識のレベルで怒るとか、悲しいとか、*affect*と先ほどから話が出てくることも、そういうものも含んでいるけれど、さらにそれを越えたようなレベルで、そこにある。私たちが身体的存在としてしかあり得ないので、それがこのように共在しているということではなくて、もちろんネットワークやツイッター、音など、いろいろなところでそういうことは起こり得ると思うのです。だけど、何も感じないという状況でも、私たちがそのように身体として存在しているということ、やはりそこに *affect* や、共在しているというようなことが起こっている。そこを基点として考えていきたいというのが今の考えです。

**(中尾)** 分かるのですが、知性ではなくて、感性とかということを超えて、感性にも

還元されないような何か関係がありそうかなという感じがしたのです。

(西井) そうですね、音とかだけではなくて。

(中尾) 聴覚、視覚とか、そういう感覚にもならないような私たちの存在のあり方。

(西井) 存在論的と言ってしまふとあれなのですが、その部分を含めて考えられたらいいなというのがあります。今日は実は出発のシンポジウムなので、これからそういうことも含めて考えていけたらいいと思っています。どうもありがとうございます。

他にもありますでしょうか。よろしいですか。

この後、途中でも言ったのですが、「プロペラ」という近くのところでまたスピリットを入れながら会話を続けたいと思えますので、もしよければ、この場に残っていただければと思います。今日は長時間にわたり、どうもありがとうございます(拍手)。



## 基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」とは

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティヴへの関心が高まってきた。また他方では、その対極にむかう方向性として、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフオーダンス、社会空間など個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、すなわちミクロ・パースペクティヴを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向を前に、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究を超えた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点において先導的な役割を担うことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるミクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の創生を企図するものである。

### ● 研究主題のさらなる焦点化と先導化にむけて

—〈情動 *affectus*〉と〈社会的なもの *the social*〉の交叉をめぐる臨地・理論研究  
(二〇一三年六月追記)

過去三年にわたる共同研究活動を通じ、本基幹研究では、ミクローマクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当

の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に収斂するのではないかの視座を得た。

情動とは、個体の怒りや悲しみといった通常の個人の感情に限定されず、意識や主体を超えて、フィールドに共存する身体が互いに影響しあうことで生み出される反響関係に焦点化するための概念である。その関係は、人と人の関係のみではなく、人やもの・環境など様々な関連性のプロセスを含む。主体やエージェントといった人間の意志を起点としてものごとを捉えていく方向性とは逆に、ものごとくに巻き込まれていく受動性とそこから浮かび上がる生の現実を照射することを目指しているといえよう。それは、スピノザやドゥルーズに影響を受けた近年の情動論的転回 (affective turn)、「身体性の人類学」、アクター・ネットワーク論などの動向とも共振する理論的方向性をもつものといえる。

複数的な情動の連鎖をつうじて、人びとの想像力に胚胎するモラルの次元にまで視野を展げてみよう。社会的なものは、これまで「市場外要素」のような消極的な価値づけを施されることも確かにあった。しかし、グローバル化(グローバル経済、グローバル内戦…)の今日、社会的なものもつ創発的な価値が、経済的なもの、あるいは政治的なものとの対照において、人類学の分野でもひとときわ光彩をはなつ主題として再浮上しつつあることは示唆的であろう。

今世紀に入り、人間の生が不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない。そうした時代状況のもとで、私たちは己れの生をなおも継続していかねばならない。これまで、人間の生をめぐる思考は、不確実性をそれ自体として見据えることなく、確かに実在しているように見えるものを抛りどころとして展開される傾向があった。しかし、不確実性を「リスク」と「チャンス」の計算式によって覆い隠したままでは、生の現在性に真摯に対峙する学的営為の芽は失われてしまうだろう。「感情と構造」のよう

な秩序志向の概念対立としてではなく、今日の世界各地で生じつつある未知の社会的胎動を感受するために、そして人類学の内部にいままた新たなアクチュアリティを回復させるために、情動と社会的なものの変化する現場⇨フィールドでの探究を、本基幹研究のさらなる先導的課題として、ここに明示する次第である。

【参考】

西井涼子『情動のエスノグラフィ』京都大学学術出版会、二〇一三年。

真島一郎「モース・エコロジック」『現代思想』三九（一六）、二〇一一年。

床呂郁哉・河合香吏編『もの人類学』京都大学学術出版会、二〇一一年。

三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ』弘文堂、二〇一二年。

カイエ、アラン『功利的理性批判―民主主義・贈与・共同体』以文社、二〇一一年。

菅原和孝『感情の猿⇨人』弘文堂、二〇〇二。

デュピユイ、ジャン⇨ピエール『ツナミの小形而上学』岩波書店、二〇一一年。

ロバーツ、マイケル「ナシヨナリスト研究における情動と人」『思想』八三三、一九九三年。

基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」

二〇一四年度、第一回公開シンポジウム

「〈情動 sense, emotion and affect〉と」

〈社会的なもの the social〉の交叉をめぐる人類学的研究」

編集・発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三―一一―

TEL 〇四二―三三〇―五六〇〇

FAX 〇四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://coe.a.u-tokyo.ac.jp/kikanjinrui/>

発行：二〇一六年二月二二日

表紙デザイン：中村恭子

印刷・製本：株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三